



婦人の子孫

第一卷
第九號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿三字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざる。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行 ○第一號明治三十四年一月二十日發行

定價

一冊金拾錢 郵稅金壹錢 ○六冊前金五拾七錢 郵稅金六錢 ○拾貳冊前金壹圓拾錢 郵稅金拾貳錢 ○臨時増刊は其都度定價を定めて別に申し受く ○切手代用は壹割増にて壹錢切手に限る

注文

は總て前金にて日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂宛領收證は別に發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし 送金は神田今川橋又は日本橋區本石町郵便取扱所受取人金昌堂宛の事見本を要せらるべきは郵便切手(但し壹錢に限る)拾貳枚を添へて申越さる可し

購讀者

宿所姓名は楷書にて御認めのこと ○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ ○前金相切候節は赤にて ●印を御姓名の上に附し候間前金御送付を乞ふ ○御入用なき時は御斷りを乞ふ

編輯者

に關する御照會及原稿御寄贈の節は東京本郷區女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會宛のこと

廣告料

三十二行廿四字詰一行十八錢 ○特別欄一行四十錢 ○一等二十錢 ○特別半頁十一圓 ○一頁二十圓 ○一等半頁五圓八十錢 ○一頁十圓 ○二等半頁五圓 ○一頁八圓

明治三十四年九月二日印刷
同 年九月五日發行

不許複製

編輯者 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 杉山辰之助
發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 日下主計
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地 熊田活版所
發行者 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發售所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

大賣捌所 東京東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

婦人と子ども第一卷第九號目次

卷首

パウエル氏名畫トリ―湖上ベルリの勇戦

子ども

丈助の忠義○室内遊戯○最善の紹介狀○一口話○考へ物

家庭

母の言葉……………高木四郎

小さき日記……………印東かどな

今昔いろは料理……………石井泰次郎

學術

夏の海邊……………東海生

講義

兒童研究法……………文學士松本孝次郎

史傳

野村望東尼……………下村三四吉

文苑

古茂藏……………新保馨次

月前竹……………東くめ子

和歌數首

說林

幼稚園保姆に望む

愚痴と取越苦勞

寄書

世の母たる人に告ぐ……………埼玉羽山好作

余が實驗せる特殊の家庭と其兒童……………盛岡菅原文一郎

富士南麓地方の子守歌……………駿河西村和一郎

雜錄

九月の天地……………まか生

瀛軍旅行と道連の幼兒……………ひさ子

女監を見る……………落生

印度土人の家庭生活(完結)……………Y I

彙報

數件○會告

フレーベル會規則

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ

第五條 合聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ル

モノトス

一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一 會長 一人 會務ヲ總理ス
一 主幹 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ

第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條 主幹ハ會長ノ特選トス

第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス
但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス

第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ

第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

家庭及婦人最良之讀物

女子の友記

毎月一回
十八日發行
定價一冊金拾錢
全國無遞送料

女子之友記者編纂

表紙石版彩色摺
口繪寫真版挿入

小兒の行爲

定價金廿五錢
郵税金四錢

小栗風葉、柳川春葉
徳田秋聲、梶田薄水 作

表紙石版彩色摺
製本高尚優美

家庭小説

定價金廿錢
郵税金四錢

速水不染君編

表紙石版彩色摺
口繪寫真版肖像及畫

閨秀畫家經歷談

定價金廿五錢
郵税金四錢

勁林園主人編

表紙石版摺美本
口繪寫真版數葉挿入

ジャンダール
ナイチンゲール

定價各廿錢
郵稅各四錢

女子之友記者編纂

表紙彩色石版摺
口繪寫真版挿入

明治才媛文集
明治才媛歌集

定價各廿五錢
郵稅各四錢

理學博士佐々木
忠次郎先生校閲 三宅恒方先生著

初學昆蟲採集法

定價拾五錢
郵税金二錢

我が女子の友は生誕以來非常の健康と幸福とを以て成長發達し來り、今やこの温かなる家庭の寵兒は、齡百を重ねんとするに至れり。何物の光榮か之に加へん。今後は益々其健全を謀り家庭及び婦人が最良の師友たらんことを期すべし。願くは世の婦人女子からんものは悉く我が女子の友を友として誦々たる家庭に尙一層の和氣を置め以て人生無上の幸福を享けられんことを

(前付の二)

發行所 東京神田區鎌倉町三番地 東洋社

此廣告に依り御注の文は方婦と人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

國語研究會編

高等普通文綴方教科書

全二冊

第一二學年用金十五錢

第三四學年用金十五錢

郵稅各金二錢

茨城縣師範學校長 鈴木龜壽氏校閱 湯澤直藏氏著

新令 準據



全二冊

尋常科用 金三十錢

高等科用(男女) 金三十錢

郵稅各金四錢

本書は新令實施後全國各府縣に於て最も多數採用せられたる修身の教科書數種に基づき學年別に之が教材を排列し且つ關聯せる事項を配當したるものにて其教材は尋常科にありては男女共通とし高等科にありては男女によりて悉く區別したりされば兒童の境遇に適切なるは勿論一度此書に據りて教授する時は兒童をして自然に法に副ひ公徳を養ふに至らしむべく實に近來無比の良參考書なり

發兌

東京市日本橋區本石町三丁目二十三番地

金昌堂

總裁小松若宮妃周子殿下

私立大日本婦人衛生會

會長侯爵夫人 鍋島榮子 副會長濱尾作子
幹事鳩山夫人以下六名 評議員若干名
賛成員諸名醫大家百餘名

(前付の四)

目的

況く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を啓き隨て社會全般の幸福を増進するにあり
毎年八月九月を除くの外毎月一回集會を開き朝野の名醫大家を聘し衛生上の講義演說談話を囑し會員及其同伴人をして聴講せしむ但毎年一回若くは二回懇親會を開き會員相互の親睦を圖る

雜誌

毎月一回定時刊行し無料を以て會員に分つ ●雜誌所載 ●講演(諸名醫大家の演說) ●寄書(大家の寄送) ●衛生叢談(衛生上諸般の注意) ●中外彙報(内外醫事の細大を載す) ●養生訓(養生に關する教草) ●食物調理法(和洋若くは折衷料理) ●其他官令會報等數欄あり
入會の節は住所氏名及び會員の種類を明記し本會事務所(東京市牛込區矢來町三番地)宛申込まるべし

會費

會員を終身、特別、通常の三種とし ●終身會員は一時金拾圓以上を納むるもの ●特別會員毎月二十錢以上 ●通常會員一ヶ月拾錢を納むる者とし府下の會員へは毎月領收人を差出すべし ●地方にある會員は三ヶ月以上半年若くは一ヶ年分を東京市牛込區郵便局宛小爲替にて前納せらるべきこと但郵券代用一割増
男子にして本會の趣旨を賛成する者は之を賛成員とす其會費は本會々員に同じ

支會

本會には新潟、山形、千葉、宇都宮の四ヶ所にあり地方に於て本會々員十名以上の發起人あるときは本會長の承認を経て支會を設立することを得詳細は事務所へ紹介せらるべし

會 員 募 集

明治三十四年八月

事務所東京市牛込區矢來町三番地

私立大日本婦人衛生會

割烹生徒募集

初學

來九月一日より從來本科外に左の簡易科
を設け初學者の便益を計る

簡易科

授業日毎週一回金曜午後

學科 割烹初步實地授業

卒業 三ヶ月

○詳細は本科と共に規則書に記せり

東京市京橋區鈴木町十一番地
京橋北
東横町

石井割烹教場

第一篇第三號目次

定價十二錢 郵税二錢 毎月一回二十日發行

口繪寫眞版

○播磨發見の瓦經

論説及考證

○探古考證雜抄……………三宅米吉

○四方寺印の考……………根岸武香

○掃部長者の膳の話……………大槻如電

○過海大師東征傳に記されし錢貨名稱考……………山中笑

○死體埋葬に甕を用ゐし事實の研究……………和田千吉

○古墳發見に關する農具に就いて……………沼田賴輔

○正倉院文書の種類……………根岸武香

○埼玉縣所在鰐口年表……………沼田賴輔

○鐵鏡銅鏡の製法に就いて……………關口老雲

○傳聲器瑠璃字普流……………山縣昌臧

○虎御前及少將の笈……………西川國臣

○上總國長保郡山根郷小村飯尾の銘ある鰐口に就いて……………沼田賴輔

○考古雜綴 第一回……………沼田賴輔

彙報 十數件

雜錄

大賣捌所 東京市日本橋區本町三丁目十七番地
金港堂書籍株式會社

帝國婦人協會發行

日本婦人

第貳拾貳號

八月廿五日發兌

「日本婦人」は、創刊以來常に世の風潮に先んじ、自ら期して中樞社會の指導を以て任せり。其記事體裁の高尙優雅にして、俗流に超越せるは、已に世の定評ある所なり。思ふに搖籃を搖かすの手は、以て能く天下を搖かすに足る、社會風潮の清濁は、其源男子にあらすして女子に在り。一家を釐正し一國の風教を善美ならしむるもの實に女子の勢化によらざるを得んや。願みて我國現下の状態を見れば、新舊過度の時代にありどはいへ、萬の錯雜紛亂、婦人社會の事、之を往昔に比して、寧萎靡退歩せるの感なき能はざるなり。吾人徳薄く、力非なりと雖も敢て吾か信する所を以て、其微力の盡くるまで、世の至仁眞誠志を同しうするの諸賢に、其同情同感を免めんぞす。

「日本婦人」は斯くの如き意氣、斯くの如き微衷を持し、致々進々、而かも徐ろに、婦人社會の木鐸となり、風教を純正畫一ならしめ、以て聊か貢獻する所あらんことを期す。

次號よりは、發行期を十五日とし、記事牀裁も共に革新する所あるべし。

毎月一回
定價一部金拾五錢
郵税一冊金壹錢
會員へは無料にて配付す

帝國婦人協會
東京區元園町二丁目
電話番 六四六

目 要

- 卷首筆蹟 高崎御歌所々長書贊
- 女子の智育につきて 下田歌子
- 各位のため 草ぬき禮講議
- 枕草子講義 井上歌子
- 源氏物語抄解 戸川花子
- 日本歴史談 關根正直
- 動物談 小野山
- 書方 小野山
- 看護法講義 小野山
- 戶外遊戯 小野山
- 表出遊戯 小野山
- 裁縫 小野山
- 料理 小野山
- 造花 小野山
- 編もの 小野山
- 押繪 小野山
- 日本人の體育につきて 淺岡
- 屏根下の哲學者 淺岡

和歌彙集

(前付の六)

大日本婦人聯合會機關



每週
月曜

婦女新聞は明治三十三年五月十日皇太子
殿下御慶事の記念として第一號を發行し
爾後每週日を誤りたることなし

(定價)

一部金三錢 ▲一ヶ月十二錢 ▲三ヶ月三十七錢 ▲半年七十二錢 ▲一年一圓三十五錢 ▲全國無郵税 ▲郵券代
用は一割増 ▲見本に限り往復はがきにて申込あらば呈す

(社説)は常に婦人界の羅針盤となり(訪問)は名流の女子教育談、家庭談、學術談を掲げ(子
供)は無邪氣の子供の行爲を集め(家庭)には主婦の心得となるべき事柄(參觀)は女學校
孤兒院工場等の參觀記(小説)は純潔清新のもの(衛生問答)は衛生に關する一般の質問に
答へ(はがきよせ)は讀者の聲にして婦人の輿論をこゝに見るべし(雜報)は婦人として心
得べき社會の出來事及び全國の婦人會女學校の消息を傳へ(東西南北)は世界の出來事
に對する二行の短評なり其他(科學)講義(文苑)演壇等いづれも有益苟も時勢に後れさ
らんとする婦人は必ず本紙を讀まざるべからず、卑猥なる記事を以て充たされたる新
聞紙に眉を顰むる人は乞ふこの婦女新聞をとりてその清潔なる家庭の友とせられんこ
とを。

發行所

東京市神田區
三崎町一丁目十番地

婦女新聞社

電話本局二千六百九十七番

特約販賣店

明治館 ▲東京堂 ▲東海信文合資會社 ▲北隆館 ▲盛文堂 ▲勉強堂 ▲其他重なる雜誌店

此廣告に依り御注文の方婦人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

毎月廿日發行

女學 百 姬 合 誌

毎月廿日發行

定價郵稅共前一金拾壹錢六冊二十冊壹圓郵券一割増

(前付の八)

本誌聊見るところあり大に規模を擴張して女子の記者數名を増聘し、七日二十日發行の第四卷第一を以て誌面に一大刷新を加へたり。幾多の婦人雜誌未惺眠より醒めざるに際し、本誌の刷新が如何に光彩を放つかを見よ。

姫百合は營利的販賣物にわらず。自ら負ふところありて生れたるもの、誌上に於ける筆路は甚だ公明正大なり。

立言正確、議論縱横、婦人の爲に社會に訴ふるところ少からず。婦人の爲に猛省を促すところ少からず。纏つてその友として筆を執れば、丁寧親切よく三才の童女と雖愛讀措く能はざらしむ。蓋婦人雜誌界の覇たるべし。

本誌は刷新に際しまつ紙面を擴張して四六判二倍の大冊子としたり。

每號多數の寫真版亞鉛版木版等を挿入す。

「主義」欄「啓發」欄は能く女子の師とすべく、「談話」欄は慈母が説くところの談話として聞くべし。「美文」「長詩」「短詩」の三欄は識らず知らずの間に美情を養ふを期し「小説」欄は以て社會的常識を發達せしむるに足る「團欒」小女に到つては筆法忽ち一轉、小女の爲にお伽噺をかたり、家庭團欒のうちに加はりて珍談奇說縷々として盡さず。全篇委く金玉の文字、大家筆に成るもの又少からず。

加ふるに每號大方才媛の寄稿を歡迎して錦上更に珠を飾らむとす。

社合百姬

東 京 市 神 田 區
北 神 保 町 三 番 地

所 行 發

戦勇のリップベ上湖ーリエ



婦人と子ども 第一卷第九號

(明治三十四年九月五日)



(本欄は凡て
轉載を禁ず)

丈助の忠義(ついで)

やまとの翁

所が暫たちますと案の通りお姫さまの顔色がだ
んぐ青くなつてきて、と一ぐ其處え倒れてしま
つたのです。けれどもこの時わ、皆がお酒に酔つて
騒いで居るのですから 誰も氣の付く者わない。そ

こて丈助わいきなり飛んで行つてお姫さまを抱いて來て別間えお連れもーしたがもーお姫さまわ息が絶えくです。

けれども丈助わ烏に聞いてるから別段にあわても騒ぎもしません。靜にお姫さまを寝かせてそれから烏の言つた通りお姫さまの胸から血を三滴だけ吸い出して捨て、仕舞いました。所が如何にも不思議です。お姫様の顔の色がだんくもと通りにお直りになつてご氣分もすつかりお直りになりました。

この様な譯をご存じのない若殿様わ 前程から丈助のして居たことをご覧になって 大變にお怒になりましたして すぐ他の家來をお召しになりました 「丈助といふ奴わ まことに不埒じゃ すぐ牢屋え 入れて 縛つて置け」とお言ひ付けになりました。 さて翌日になりましたと 可愛相にこの忠義な丈助わ 牢屋から引き出されて 一應お調の後で 絞首臺の上え載せられました。そこで も一お所刑が始まる一とゆ一時 丈助わ若殿様に向いまして 「あ暫く……暫らくお所刑をお待ち下さいまし。も

「私もこの年まで奉公を致しましたので只今命を捨てましても少しも惜しいことがござりませぬが たつた一言申し上げて置きたいことがござります どうかお聞濟を願います』で殿様わ
 『おー何なりとも申せ 苦しゅうない』とお許になりました。

丈助わ 覺えず流れ落ちる涙を拭い 『ご存じがあらりませぬから 更々ご無理とわお怨みわ致しませぬが このお所刑わ間違です 私は一度だって不忠を致した覺わござりませぬ こんどの一件も申し

上げねばお分りになります。すまいからこゝで始から
終まで申し上げました。よー」

それから丈助わ船の上で聞いた烏の咄から馬
を撃ち殺したのもまた今度お姫様の胸の血を取つ
たのも皆烏のいっただことを聞いて殿様ご夫婦を
お助けする爲であったことやそれから自分わこ
れを咄せばも一石になつて仕舞つて二度と人間
になつて忠義をすることが出来ないのだとゆーこ
とを申し上げました。

これをお聞きになつた殿様わ驚いたの驚かない



のって『オー』そーだ
ったか 何事も余が知
らなかつたからじゃ
許して呉れ 許して呉
れ こりや 誰か丈助
を 勞つて つれて行け
い』と仰せられたです
が あわれ
丈助わお終の一言をゆ
いとすぐ 身体が固く

なつてとーどー石になつてしまいました。

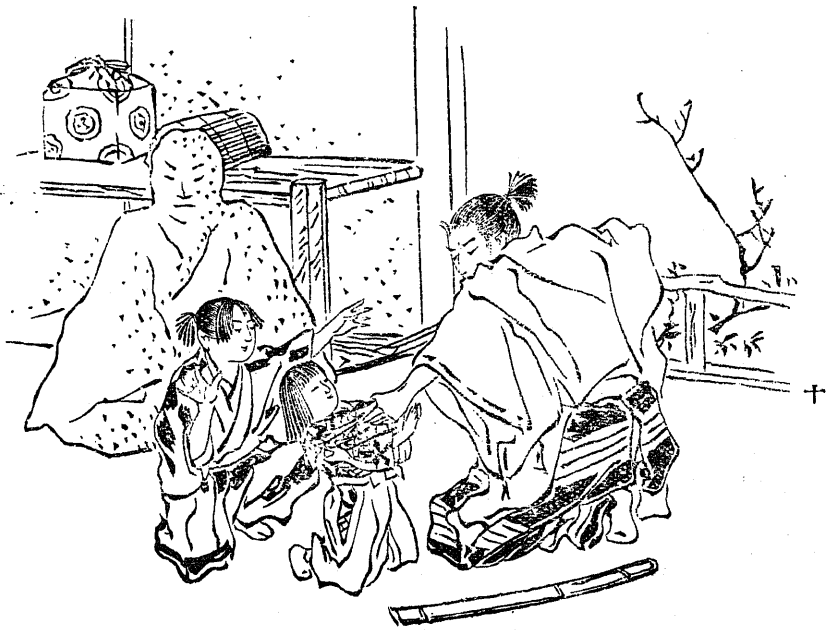
で 殿様もお姫様も大變お歎になりました非常に
 殘念がられましたか もーお取返がつかせせん。致
 し方なく丈助の石像を 御居間え祭りまして 朝夕
 これを御覽になつてわ 涙を御流しになつて 『嗚呼
 丈助や も一度生き還つて來て呉れないかねー』と
 いつて何遍も繰り返されて居ました。

それから 何年か経ちまして お二方の中に可愛
 いお子さんが二人までお生れになりましたが 或る
 日お姫様わ お寺參りにお出かけになつた 留主中

二人のお子さんたちわ 御殿でお父様のお側で 面白くお遊びになつて居られます。そこで殿様わ 例の石像を見上げられてまして 『嗚呼丈助や どうかしても一度生き還つて呉れないかねー』と仰せられました。しますると不思議なるかな この石像が忽ち物を言ひ出しました。『ハイ殿様 それほど仰やつて下さるなら あなたが一番お大切の物を私に下さいますれば 私はすぐ生き還ります』殿様わこれわ不思議だと思し召されましたが 何が偕大變なお喜で 『あゝ上げるとも 上げるとも お前の爲ならなん

でも上げる。と仰せられる。すると石わ『でわ、あ
 なた御自身でそこに遊んで居らっしゃるお二人
 のお子さんの首をお斬りになってその血を私の身
 体に注ぎかけて下さい。すれば私わ生き返ります』
 さすがの殿様もこれにわ驚ろきました。可愛い
 二人の子をどしして自分で手にかけて殺すことが
 出来よーいくら何でもこれ許りわと思し召され
 たがまた思い還されていや／＼そーでわない
 丈助わ忠義のために死んだのだ吾々を助けるた
 めに自分の身を石にして仕舞ったのださすれば

今丈助を助ける爲なら
ば どんなことでもし
なければならぬ。まし
て たった今何でも呉れ
て やると約束までした
のだ あゝ仕方がない
小供わ可愛そーだが忠
義な丈助を助ける爲だ
と こゝにお覺悟を決め
られて やがて短刀引



き抜き なんにも知らないで 側に遊んで居られる
二人のお子を引き寄せて 流れる涙を拭いもあえず
兩の眼を閉ぢ南無の聲と共に お二人の首を切り落
としました。

さて 其血をしぼって石に注ぎかけるが早いか
丈助わ忽生き還って殿様の前に平伏致しまして

『あなたの御信心によつて 私は又生き還りました
この御恩還しわ きつと致します』と申しまして
今斬り落された二人の若様の御首を拾い上げて そ
れそれもとの通りに次ぎ合せて そこいらに流れて

居た血を注ぎかけました所が 不思議なるかな 死
 んだと思ひしお二人の若様たちわ 忽ムツクリ起き
 上りました 今までのことわさっぱり 何もござん
 じなかつたかの様に きやくといつて遊んで居
 られます で殿様の御喜わ 申すまでもなく 大變
 なご満足でございます。 所えお姫様が、お寺參からも
 ーお歸になられたとゆーお知らせが ございました
 ので 殿様わ早速、丈助とお二人の若様とを 次の
 間えお隠になりました。 お姫様わ夫とも御存じがあ
 りません お歸になりましたして殿様に御挨拶を致しま

して さて申まうされますにわ、『私わたくしわお寺てらえ参まゐりましたして
 も 丈助ぢよすけのことが心配しんぱいで心配しんぱいで堪たりませなんだ あ
 んなに忠義ちゆぎだったのに 大變たいへんな不幸ふくな目に遇あせまし
 たかと思おもいますと』そこで殿様とのさまわそしらぬお顔かほで
 『そーさ私わたしも毎日まいにち歎なげいてるたがね……………時にこーゆー
 話はなしがあるがそなたの心こころわどーかね 丈助ぢよすけをも一度いちど生い
 き還かへせよーとゆーのだ 但たゞしそこに困こまったことがあ
 るので弱よわる そーするにわ あの可愛かわいい若わかを二人ふたりな
 がら殺ころさんければならぬだがのー 一つひとつそなたの考かんが
 を聞ききたいのだ』お姫様ひめさまがどーお答こたになるかお試たし

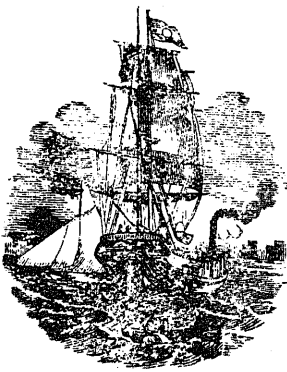
なすたのです 所がお
姫様は 若様をお二人
とも殺すとゆーのを
聞になられて 忽お顔
の色を眞青にして 驚
かれましたかやがて深
くご決心の御様子で
「我夫様 致方がござ
りませぬ 貴方も私も
丈助に助けられたれば



こそこゝして居られるのです。子供わ可愛相です。が、丈夫の爲ですと、お答になりました。で、殿様もこのお答が丁度ご自分のお考と一所でしたから、大變御満足でいきなり次の間の障をお明けになりました。所が三人が左も樂そゝにそこへ出て参りました。一生石でお終になると思つた忠義な丈夫、わ生き還ります。し、不憫ながらも殺さなければならぬと覺悟されたお二人の若様もこの通りお丈夫であるのをご覽になつてお姫様わまゝどれほどお喜びなすつたでしよ。

さて これから後丈助も 相がわらず忠義で長生
致しまするし お二人の若様も段々ご成人遊ばされ
まして 皆が楽しく面しろくご繁昌でお暮になりま
したとさ なんとお目出度お話しでわありませぬか。

(おしま)

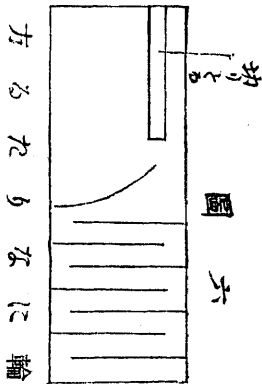


室内遊戯

紙の剪り方

細い紙を、縦に二つに折つて、輪になつてをる方から、一圖の線のよゝに、斜に剪刀を入れ、残らず切れさらしたら、ひろげて切れた所を、立て、ごらんなさいされーです。(二圖)

又これを色紙でして、その切れた所を裏と表へ互いちがいに出して立てますと、何かの花のよゝになります。(三圖)



又前と同じよゝな紙

を、やはりたてに二つに折つて、今度は兩方から、四圖の線のよゝに、かわりがわりに剪刀を入れて、これを丁寧ひろげ、静にのぼしますと、鎖が出来ます。(五圖)

さてこれらが出来ましたら、一つ釣り花いけを拵えてみましょー、それは半紙半折を、縦に二つに切り、その一つを取つて、先づ縦に二つに折り、又横に二つに折り、四重

はよく梳してあり、其齒は雪の如く白く見え、自分の名を書かせた時に墨を摺り飛ばさず、又指を汚さなかつたわ不精者や不注意者の出来る事でない、して見れば僅かに十分間であるもの、予が視察した所は、賛辭の溢れるばかりの數十本の紹介狀に勝るは万円でわあるまいか？！

一口ばなし

近眼と石地藏

或時近眼が石地藏の前へ來まして、(近眼)アノ一寸お尋申します、この次の町までどの位でございますか。(地藏)……………(近眼)もしく次の町までは まだどの位でございますか(地藏)……………(近眼)はてなこの人は聾か知らん、もしく、これは怪しからん人に散々物を言はせておいて 何時

までも黙つて居る、怒つた機会に石地藏の頭に駐つて居た鳥が飛んだのを見て(近眼)人に道を教へないから、僕も帽子の飛んで行つたのを知らせて遣らないんだ。

前號考(物の解)

- (一) Untie (結び付けること)とU言葉の中、一字だけ置代へると全く反對の語になるのは。答。iとtとを置代へると Untie (はぐく)となりませす。
- (二) 自分のものであつて、自分よりも友達に多く使はれるものは、答。自分の名。
- (三) 背の高い人は、いつも怠者だといはれる譯は。答。寢床へ這入ると、いつでも人よりも長いから。

この次の考へ物

(一) 黒い羊は、白い羊よりも、草食ふことが少いといふ譯は？

(二) 足なくて走るものは？

家庭



母の言葉

高木 四郎

母の兒童に對する言葉の、今日の一般をみると、兒童に對して、母の言葉が多すぎる様である。多

すぎると、從つて、母の言葉に勢力がなくなる。勢力がなくなると、母の言葉が、兒童の言葉のために斃される。また、言葉の数が多すぎると、自然、取り消しをしなければならない場合が多く出来る。そこで、母の言葉の、取り消しだの、敗北だのが、度重なる時、その兒童は、世にいふ、言ふ事を聞かない兒となるのである。

兒童が、親の言ふ事を聞かないと言ふ事は、最も恐るべき事で、兒童のために、此の上もない危険である。兒童は、熱いものを知らず、怖いものを知らず、やゝ成長しても、病の恐るべき事を知らねば、どーしたら病に罹るのかをも知らない、であるから勿論命といふ事を知つて居るはずはない。また、池の縁に臨んで、落ちると恐しいといふ事は、よし知つても、かうすれば足が這るとい

ふ事を知らず。又物は、物がさかれるといふ事は、
縦令知つても、かうすれば自分の指が斬れるとい
ふ事を知らない。

かく、何も知らないづくしの児童を、明智の域
に導くものは、これ偏へに言葉である。従つてま
た、言葉によつては、その反對に導くのであると
いふ事も、特に爰にことわつておかねばならない
のである。かういふ様に、母の言葉は、児童訓育
上、甚だ重いので、家庭の教育といふも、つまり
此の言葉が導くのであるといつてもよいのであ
る。然るに、此の重くなければならぬ母の言葉の、
今日の實際を見ると、甚だ軽くて、むしろ、児童
の言葉の方が、目方があり、勢力があるのである
今その實例を、三つ四つ擧げつゝ、評して見よ。

(一) 児童は友達が來たので、忙はしく下駄をつつ

かけて、勝手口を、外へ出でんとすると、
母、外へいってはいけません。

兒、だってかーさん、さっき、家に居ては喧しく？

ていけないいたちやーないか。家に居ても、
外へいってもいけないやー、どこに居れば

いーの？

児童はなかく、理屈家であるが、これは兄に
しこまれたのである。母は何と答へるかと思
ふと、

母、遠くへいってはいけないと言ふのさ。

(評)母は、甘くさり抜けたが、初めには、外へ
いつてはいけないと、確かにいつておきなが
ら、今かう云ふのは、自家撞着である事は、明
らかである。

兒、遠くへいきやーしない、此處で太郎さんと

遊んで居るんなら、いーだらう。……か

ーさんいつでもよけいな事をいつてらー、

だから兄さんが、うつちやつておけといふん

だ。

(評) 兒童は、母までが怖がつて居る兄さんを引

き出して来て、頻りに母の言葉の、輕卒であ

つて、更らに條理のたたないのを責める。

太郎 君、遊ばないの………?

兒 うーん、今行くの………!

(評) 爰において、母の言葉は、確かに兒童のた

めに打ち破られたのである。目前で忽ちにし

て敗北を見たのである。かういふ事が度重な

ると母の言葉の輕くなるのは當然であらう。

しかしこの位の事はまだ、罪の輕い方なの

である。

(二)

裏棚の貧家住まひではあるが、人間は由所わ

るものと見えて、夫婦ながら、處に似ず人品

がある。其の裏棚の小路を、今や金魚賣が這

入つて来る。その家の兒は、二三人の友達と

遊んで門口に。

金魚賣、金魚やー金魚

兒 かーちやん金魚買つて………

母 いけないよ。

金魚賣、金魚やー金魚

兒、 かーちやんよー、金魚買つて、よー、

金魚賣、金魚やー金魚

金魚賣は遠慮もなくだん、這入つて来る、

母、 いけなかつたら、こつちへおいで。ー

兒だからぬー、一寸おいで、

(評) 母は氣が氣でないから、こつちへ兒童を呼

ばうとしてすかせど、だませど、児童は勿論言ふ事をさかない。其のうちに、金魚賣はいよ
 門前へ来て、

金魚賣 金魚やー金魚。

兒 よーかーちゃん、よーかーちゃん、よー

よー

といつて終に泣き出したから、今いー兒だからといつた母は。忽ちかはって、

母 うるさいねー金魚賣さん一つやうてく

ださい、家の兒は言ふ事を聞かないでこまる。

(評)母が兒童の云ふ事を聞いてこまるのである。此の時兒童はすぐに莞爾として、今まで反對した母のそばへすぐもつていつて

兒 かーちゃん金魚!

(評)母は何と返事するであらうか、此の天真爛

漫にして愛すべき自然の神の言葉に、と思つて聞いて居ることもなしに聞けば、やはり返事が出来なかつたと見えて、

母 金魚を買つてあげたから、おどなくしな

ければいけないよ。そちへもつていつてか遊び………!

(評)此の問答は、誠に餘儀ない場合とはいへ、兒童に泣かれるのど、否、寧ろ金魚賣の目前に來て居たため、母は、一種忍びざる情に逼られて、遂に母の言葉は、自然隱滅といふ姿に、母自らしたのである。是れもまだよい方法の確かにあるのであつて母は初めに愛にひかされたからかく隱滅せしめなくてはならぬ様になつたのである。買つてやつたのが悪いといふのではない。唯母の言葉に、初め今少

しの慎みつとめがあつたならば此の隠滅いんめつ的敗北はいてきは見
ずに、兒童こどもを泣かせずにするであらうもの
を遺憾いがんなのである。

(三)

濱はまの眞砂まきさのそれよりはと思ふほど世に多い例
であるから、特に場合を擧げないが……

兒 かーさんいってまいーの……

母 いけません。

兒 だつてかーさんさつきいってまいーたでは

なすの……

(評) 前に母と約束があつたらしい。然るに、

母 それでも今御用があるからいけないよ。

(評) 此の母の答へは、何と兒童を輕蔑した言葉

ではないか。先には確かにいってまいーとさつ

たのであつた事は、今此の返事をさしても明ら

かである。其の約束の時間内に何か用が出来

たならば、たとひ母でも頼む口調で出なけれ
ばならないのである。然るに今かういふ事を
いふのは、母が兒童を一人前と見ないからな
ので、かういふ言葉の内には到底順良な氣質
を養ふ分子は、含んで居ないのである。然る
に兒童は、

兒 さう、何の御用……

母 一寸お隣へいつてもらふんだよ、

兒 それちやー其の御用がすんだらいつても

まいーの……

(評) 兒童はあくまで正當に温順にでる。此の母

にして此の兒ありとは、たゞく意外である

と思ふに、

母 まーうるさいねー、いけないつたらおよ

しなさいなねー、

兒 てもかーさんさつきさいーたちやーない

の………?

(評)此の兒童の詞こそ真に愛すべき尊き價值があるので、よく其の心に約束を忘れないのである。自分の欲する處とはいへ、かくまで約束をかたく信じて主張する、いかに邪見な母でも、これには同情を表さねばならぬと思ふに、

母、どーでもおしよ、

(評)兒童は、此の母の一言を何とさいたであらうか、此の一言は果して兒童の心裡に、如何に印象したのであらうか。又此の印象の結果は、如何なる場合に現れて來るであらうか。余はこれらについては、此の實例を終へてから、更らに論じて世の母たるべき人に對して、注

意を乞はんとする者である。

(四) 兒童は風邪の氣味で、五日程前から咳をする。母は百日咳にでもなりはせぬかと心配して、二三日前から醫者へ連れて行かうとして

居るが兒童はなかくさかないだがいよく明日は行くといふ事に交渉ができて約束がなつたので、さて其の夜は寝た。やがて明日といふ日が、今日來たのである。

母 さー今朝のうち、お醫者様へ行きましたよ。

ー。

兒 いや……行かない、

母 今日行かなければいけませんよ、さつきおとーさまも、今日はいけと言つてかいでになったではないか。それに靴前は行かないと今に咳がでて苦しくつてたまら

なくならずよ。

兒 いや……それでも僕はいや……!

母 それでも昨日は、おし行くとお約束したではないか?

たではないか?

兒 でもいやだったら僕はいやだ、苦しく

なつたつていや。

(評)それが兒童の天真爛漫、生々の活氣のある

處で、昨の事も明日の事も一向に頓着しない、

いや、そんな事を、假想するまが腦中にない、

謂はゆる現世主義なので、樂天的な處である。

此處で母は是非連れて行かうとすれば此の關

白的雄大の言に、逆らはねばならないので

あるが、それにしても、兒童が昨夜の約束を

忘れたはずはないのであるに、さらにそれに

頓着しないのは何故であらうか。さて母は

どーするかと思ふと、

母 よーとぞんず、その通り言ふ事をさかな

ければ今日は一日外へは出させません。そ

して兄さんが歸つていらしたらお藏へ

入れて頂く、……

(評)母は恐喝手段を取つた。しかしもとく恐

喝したのであるから、心には實際そーしよー

とは思つて居ないので、つまり心にない事を

いったのである。であるから、すぐに入れる事

をしないので、しばらくして又、

母 それでもいいのですか、

兒童は無言で居ると、母は決心した、だが一

時の決心で、やはり心からでない、心のうち

では、しよーがない兒だ だけ思つて居るの

である。それ故兒童は、あとで友達が來たと

もなしに、ぬけて外へ出て行く。母は知らず顔で、何か奥で用をしながら弱って居る。するどき歸つて来たが、みんなの顔つきのおもしろくないので、室の隅に尻を据ゑた。すると今度は、叔母や姉が兒童を賺し初めた。兒童の名は四郎であつた。

叔母 四郎さんいー兒だからお医者様へいって
 おいで、叔母さんがいー物をこしらへて
 においてあげるから。

姉は叔母に應援して、

姉 そーねー、若しお医者様へ行つて来れば
 おもしろい物を拵へておくわねー叔母さん。

(評)叔母は、兒童を醫者にやりたいが一心なれど、しかし猶腹に考へがわつて言つて居る

のであるが、姉はたい叔母に雷同したので、心には此の時決して何を拵へるといふ考へもなく、又何を拵へるのだから、聞いて居る兒童と同じく知らないのである、心にはい事を言つて居るのである。叔母は姉といふ味方を得て、

叔母 そーよ、ほんとに、……

姉 ほんとにねー、いー物を拵へておくわ。

(評)兒童は知るや知らずや、わからないが、此のほんとに〜が、あやしいのである。然るに又、

叔母 そーねー、あれねー、ほんとよ。

姉 えー、あれをねー、ほんとよ。

兒童は片隅に小さくなって、何か悪戯をして居たが、此のあてこすつた様な應答を、なーに

例の叔母さんと姉さんが何を言ふかわかりや
ーしないと言ふ風で、初めは聞いて居たが、
あまりにはんどーらしいので、

兒 われって何?

叔母、姉 あら四郎さんどこに居たの……あれ
ってまーいーのよ。行って歸って來なけれ
ば、わからないのよ。

兒 なんだ、いつでもどっかへ往かうと言ふ
時、いやだと言ふと、そんな事ばかりいっ
てらー。そんなものはいらぬや。

此の詞で兒童がさきに約束を何とも思はな
かったのがやゝわかった。さて、叔母や姉の苦
心も此處に在いてだめになったが、なほど一す
るかと思つて居ると、姉は又もとの事を繰り
返して、

姉 だって四郎さんお医者様へ行かないと今
に苦しくなつて大變よ。

(評) 姉は此處に初めて必の底から、眞實腹にわ
る事をいった。

兒 大變だつていーや。うるさいなー。

(評) 兒童の詞、ますく出でてますく妙。姉

たちは或は心にない事を言ひ、又ある事をいっ
ては何を言ふのやら更らにわからないから、
神聖なる罪なき兒童は、一言の下にこれら不
淨なる詞を退けて、再び愛らしき手、さゝや
けき口、うつむきながら指に唾をつけつ、少
年世界を讀むともなしに開いて居る。其の時
母は、一問隔て、此の間答を聞いて居たが、
叔母や姉の言ふ方便にかぶれたか、一策を案
じ出だし。

母 ……では、お医者様へ行ったら、淺草の觀

音様へ、かーさんが連れて行ってあげよ

う。

(評) 兒童は、自分の最も愉快な、無上の樂土だ

と常に思つて居る淺草の觀音様といふ一言を
聞いたので、心、忽ち動いて、

兒 ほんどに……？ かーさん、

母 えー、お医者様の歸りにズット行きませ

う。

(評) 兒童の醫者へ行くのは咳のためであつて、風
にあててはいけないのである。車にのせて遠
くに行くといふのは、不適當な事なのであ
る。此の位の事を知らぬ母ではないが、もと
ゝ母は心にない事をいつて一時兒童を瞞着
しよーとかゝつたのであるから咳のためも何

も忘れて、今は勢ひ醫者へ連れて行きさへす

ればよいといふよーな工合になつて来たので

ある。兒童は又此の嬉しい詞を信じて、醫者

への苦痛も忘れて、

兒 ほんどーに……？

母 ほんどーですども、ねー叔母さん……

叔母 えー、ほんどーですども、

と言ひながら、叔母と母とは、顔を見合はせ

て、何か以心傳心。

姉はまた、いらざる口をそへて

姉 ほんどーですわねー、かーさんがなんで

うそおっしゃりゃしないわ。

といふと、又、

叔母 そーです。て、かーさんが、なんでうそを

おっしゃるものですか。

など一つ事を唯繰り返してしやべる。そこで。

兒 それぢやーカーさん行かう、はやく行かう

……

母 おや行くの……、いー兒だねー、それで

は叔母さん着物させてやって下さい。姉さん

ん車夫に仕度させておくれ。

兒 嬉しいな、淺草へいったらカーさんに、

此間見ておいたあれを買って頂くのだ。

(評) 此の時の兒童の心中いかばかりであらう。

飛ぶ立つばかりの勢ひになつて、先きに辭し

た醫者にも平氣で行かうといふのである、

淺草と聞いたために。斯くて着物は着た、

姉は車の用意はできたといつて来る、兒童は今

や母の居る化粧室にはいつて、飛んだりはねた

りして母の着更への遲さをせめる。……

さて、醫者へは行つたが、歸りに醫者の門を

出ると、車夫奴は反對に家の方へ率いて行く。

兒童は驚きあはれて、

兒 權兵衛！淺草の觀音様へ行くのだよ、そ

つちへ行てはいけない。

權 觀音様へはもう暑くなりましたから、歸

つてから行きませう。

(評) 母からか、叔母からか、將 姉からか、已

に秘密の魂膽を通じてある。

母 淺草へは歸て兄さんに連れてつて頂か

う。カーさんといつても何も買へないか

ら……

(評) 偽り事である證據には、返答する毎に、

その返答がちがつて居る。

兒

僕はいやだ、觀音様へ行くつたから来たのぢやないか、ささかーさん歸りにぞ

ツト行くつたぢやないか。

權兵衛は車を一寸どめてふりかへると

母

今ねーかーさんね財布を忘れて来たから、取りに來うちへ行つてそれから行かう、…………

兒

こまつたな…………

權兵衛は車を引き出す、兒童は車の上で母の不注意を責める。母は甘くいったと大喜びで兒童よりの責めを甘受しつゝ忘れさせよ！とするが兒童は歸つて來ても忘れないで、切りに責める。母は賺ず、姉はだます、叔母は途方に暮れる。兒童はつひに泣き出して、母、叔母、姉は勿論、車夫の權兵衛までも、う

そをついたからといふので藏へ入れるといふさわざになつたのである。

是れらの例は、世に少なくないと思ふがかう云ふ家庭の詞で導かれた兒童の、うゝ偽りを言ふ事を何ども思はなくするのは當然である、母初め皆々打ち揃つてうゝ偽りを、氣がつかずに言つて居る。氣つかないと言ふのは、つまり詞に慎しみがなからである。いかに方便とはいへ、まだ清淨潔白なる兒童の心裡には、如何なる汚點を印するであらうか。かう言ふ言葉が摩重たらば、兒童は言ふ事をさかなくなるは勿論、自分もまた勝手次第な出任の言葉を口にす様になるは明らかであらう。親子兄弟間の朝夕の言葉が、已に斯くのほどくならば、地の友人等に對してはいかゞであらう。これでは世にいはゆる、口は禍の基であ

〇〇〇〇。口は幸の基でなくてはならないのである。實例はこれです。是れとして次ぎには、此の口は幸の基といふ事について述べ。それから方法に立ち入つて論じよと思ふのである。

子等よ汝まさまくれや老の親の

こゝろつくしの杖しろの身ぞ

小き日記

印 東 おとな

げん坊どお姉様

げん坊は満一年と十日お姉様は三年五ヶ月なり。

十二日。猿廻し来る。げん坊「オト、ゝゝゝ」と喜ぶ。猿の餘り杖などつきて走り廻るに氣味わるくて泣き出す。

十三日。午後八時すぎ母君姉君も共に蚊帳に入りて眠りかけし處へ神田の叔母さんと姉さんと來給ふ。叔母さんがたのおすし召食り給ふを見てよこせとて「ウーゝ」と叫び出し少し許り頂きしに又箸をよこせとて之もとどり、その箸もて側にありし菓子鉢の中をつゝきてはなめ、つゝきてはなめ、果ては湯呑茶碗をとりて飲ひ眞似さへなすに叔母君たち、こゝろけて打ち笑ひ給ふ。

十四日、障子につかまり三足ほどあゆむ、手放してたつことも梢上手になりたり。晝母君と台所に居りしに火鉢の炭はね、膝の上やけどして泣く。夕方千葉より叔父君參られしに抱れて外へ出よとて「オーゝ」と指せしも、叔父君急ぐ故、今日は勘恣せよとて立給はねば首を振りて

すねる。

すねること中々上手なり、体をねちりて首を

ふるさても可笑どもおかし。

車に乗りて歸り給ふを見て泣く。

十五日、朝十時より午後二時まで眠る、其間二度

目を覺せしも直ぐに又ねむりしなり。母君側に

仕事を爲し居りしに、二時過ぎ目をさまし獨り

起きて其側にすわる。

此頃切に物言ひたげに分らぬことをいふ。感心

せし時は「オーホー」どいひ、食物は「うま

い」といひ、蠅不入の中をのぞきては「オト

ととと」といひ、又「バ、バ、バ」アツチャツチ

ヤ」などいふ。

好きなものは花と猫と犬。

女部屋へ行には七八寸許り下るなり。此處まで

這ひ行き、まづ右足を下ろし右手を下につき

て左手をつき後左足をふるして這ひ行くなり。

上り下りども中々上手にて、少も過つことな

し。

お姉様は名を呼びてもお返事はすれども、お姉

さまと呼ぶとお返事の仕方の違ふも可笑し。げ

ん坊に向つては自分お姉様がねお姉様がねとい

ふ。

このお姉様の希望は色の白くなること、大き

くなつてお馬車に乗ること、おげんちゃん坊

ちゃんを負つて玩具だのお衣だのを買つてやる

ことで。

おげんちゃん坊ちゃんとは、げん坊(弟)を可愛

がりて言ふ言葉なり。さて憎む時は、くよ(黒)

赤坊くどいふ。

片言は餘り使はぬ様なせど、ら行の音は如何し
ても出ず。

ころんだり頭を打ちし位では なかく泣かざ
れど色黒しといはるゝと、小い女中と云はるゝ
を甚だいやがりて 果は遂に泣き出す。げん坊
が臺所へ這ひ行くを見て、直「アラ男の女中が
来たよ」といふ。何でも己の云るゝ通り、げん
坊に云ふ。其時の姉振のお菓子をねだる時の様
ど、全く反對せるこそ可笑しけれ、いとものゝ。

秋來ぬま目にはさやっに見ねれども

風の音にぞれごるかれぬる



今昔いろは料理 (へ)

石井泰次郎

紅玉子の拵へやう

玉子のよろしきを撰みて、温湯のなかに入て、
はしにてそつとかきまはして煮ぬくべし、ゆであ
がりを見るにはわみ抄子にて、一つをすくひ上て
見るに、鍋の上よりわきへはなすとすぐにからの
水氣が乾くをよしとす、すぐ乾かずに間あるはま
だよく煮わざるなり、

さてよく煮抜たるを名づけて煮抜玉子とはいふ
なり右煮抜玉子いくつにても同じ事なり、先から
のわれめを物にあて、つけて、からをむきごりて、
鍋に紅の食用によるしき、口紅か又は細工紅の氣
上味といふをどきて、玉子を入れて、火にかけて
ころがしながら煮るべし。さて色よくつきたる時

鍋をゑろして、玉子を取り出し、ままして切重ねに切るべし

切重とは同位の厚さに切てづらして重ねれくな

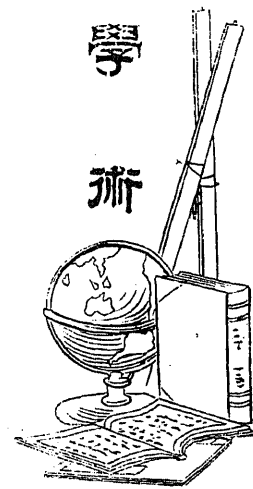
(75)

鳥田樂の拵かた

何どりにても身をおろして、一時間ほど味噌につけおき後味噌をよくぬぐひて皮をきりて身ばかりを酒をかけて焼て、あみの上にてやくべし、山椒みそ、山葵みその類をつけて青串にさして出してよし

常磐味噌の拵かた

白味噌三合赤味噌二合大白糖二百目、鍋にてそろそろと火どおりねりて、むき胡桃、白胡椒、わり山椒をいゝなり



學 術

夏の海邊(承前)

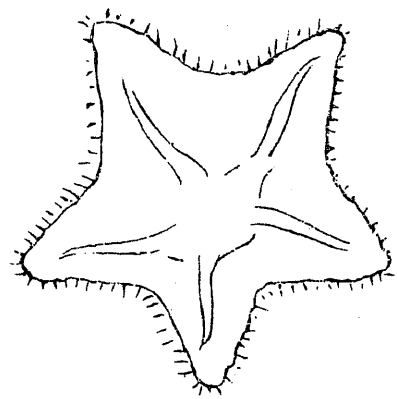
東 海 生

夏海邊に居ると、まだ〜面白くことが澤山ある。が潮沖の方まで引いて、いままで青々としていた所が、まるで川原になつて、舟でなければ行けなかつた所でも、徒歩で行けるのであるから愉快でたまらない。小な籠を持つて浅い水の中を漁りつゝ石をおこすと、まづ人手が取れる。人手は

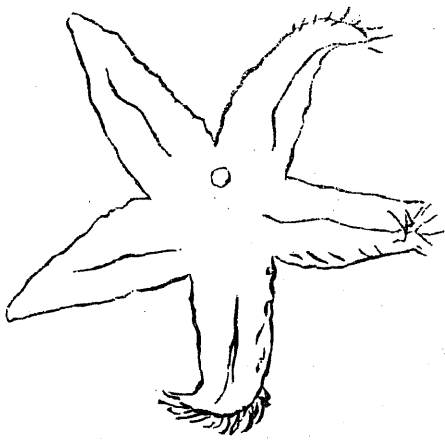
又の名を、いもみちが、いとも云ふ。其形が紅葉の葉によく似てゐるから、そういふ名を持つてゐるのだ。

普通の人手は、足が五本あるのだが、時々三本あるのや、六本あるのや、七本八本も持つてゐるのがある。これは何故であらう。

もみちが
いといふ奴
は、なかく面白
い性質を持つて居る。若しもみちがいの手が折れて落ちると、其離れた手が又一つ個のもみちがいになつて大きくなる。夫れから折



れた手は、すぐ元の様になつてしまふ。であるから一疋のもみちがいを取つて手を二つに折つて兩方ながら養つておくと、だん／＼どちらも完全なもみちがいになる。石の下には、たまに海百合でいふものが居ることがある。百合によく似てゐるから、こんな名を持つてゐる。又さがして居ると、うにが刺をむじくさせていかめしい構をしてゐる。それから水の少多

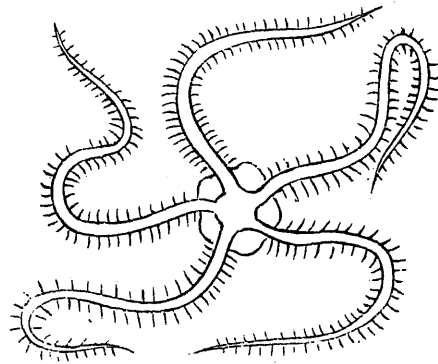


い所を靜に伺つて見ると、た、た、たの、い、か、たの、
 ば、ぜ、か、れ、え、ふ、ふ、な、ど、の、子、が、澤、山、あ、る、こ、と、が、あ
 る。

潮干の時に

あちらこちら
 を漁つて行つ
 て、岩ごろの
 ない、砂ばか
 りの處に行く
 と、あなごが
 とれる。あな

ごは大底は、砂の中に穴を掘つて這入つて居る、
 で、砂の處を歩いて居ると、あなごは頭を出して
 居ることがある、こんな時には、無論すぐ知れる
 が、さもないければ、素人には容易に分らん。何故

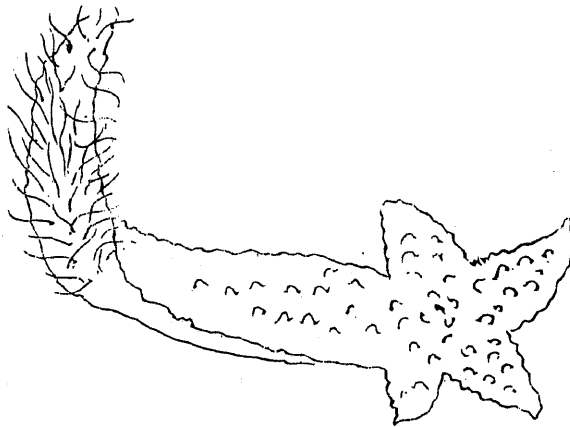


かといふと、砂原にはた、あなごの穴ばかりでな
 く、か、に、の、穴、を、む、し、の、穴、を、さ、げ、し、虫、の、穴、を、其、他
 い、ろ、の、の

ものが這入
 てる穴があ
 るので其見
 分けが六か
 しいのであ
 る。

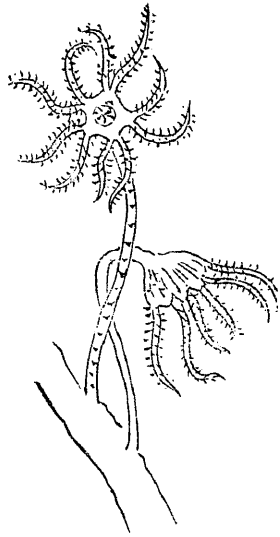
それは、
 どうして分
 るかといふ
 に何でもな

い。唯穴をよく見て、其穴が眞直に下の方に掘れ
 てるときは、これはかになどの穴であるが、穴が



斜ななめになつて居ゐれば、それはあなごの穴あなである。そこであなごを取とるにはどうすればよいか、それにはまづ、この穴あなにあなごが果はたして居ゐるか、夫それどもぬけ出でた跡あとでないかどうかを知しることが大切たいせつである。夫それを知るには次つぎの様ようにする。即穴すなはちあなの近邊きんぺんを

だしみう

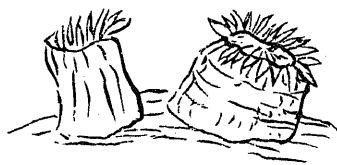


足あしで以もつてやたらに踐ふんで見みる。すると彼かれが居ゐりさへすれば、身からだ體たいを踐ふまれてはた中ちゆうらないから、いきなり飛とび出でて逃にげるから、そこをすかさず抑おさへる。すればあなごの二十や二十は譯わけもなく取と

れる。これは海邊かいへんの慰なぐさみとしては餘程よほど面白おもしろい。磯いそに出でて一番いちばんに美うつくしく見みえるのは、いそぎんちやくである。水の深ふかさが二三寸位すんくちるどろの所に静しづかに來きて見みると、赤あかいのがあつ、青あおいのがあつ、紫むらさきがあつ、白しろがあつ、實じつにいろ／＼であつて、最もつとうつくしい、之これらは

皆みな四十本ほんも五十本ほんもある手てをひろげて、何か食たべるものはないかと待まちち構かかへて居ゐる。であるから小ちひなものでも其手そのてへ

くやちんきそい



さわればすぐ手てを縮ちぢめてしまふ。それ妙手めいを擴ひろげて開ひらいてる處ところを見みんには、餘程よほど静しづかに行ゆかなければならぬ。けれどもこのいそぎんちやくといふやつは、中なか面白おもしろい、波なみがいくら荒あれていても、決けつして手てを縮ちぢめないが、人ひとが少すく

足音をはげしくさするど、すぐと手を縮める。これで見ると、波のなすのど其他のものがさわわりのどを區別する力を持つてゐるらしい。それから又小なものを手の處に、そつと置くと手を二三本縮める、こんどは今少し大きなものを手の處に置くと十本も縮める、靴終に指の一本も持つて行くと今度は吃驚して五十も六十もある手を、ピュツと一時に縮めてしまふ處を見ると、中々滑稽である。

夜の海は又別で、晝間に見ることを得ない樂がある。熱帶地方では、太陽が西に没するも光を發する小さな動物が、海の表面に上つて來る。すると海一面光の舞蹈でも始つた様で、其有様は丁度、晝間の太陽の光が波間に這入てしまつたのが、夜になつてまた出て來たかの様である。海面の光は一面に一樣ではなくて、丁度晴夜に星がきら／＼

してゐるのに似て居る。

海が靜で、波のない夜には、數萬の星が海面にきらめく。其數萬の星が始は、靜にしてゐるが段々動き出す、揺り出す、すると一方の光は他を逐ふ、他は逃げる、逐いつかれて一所になる、又はなれる、おしまひには海一面の光となる、其色が赤くなる、青くなる又緑となる、白くなる。こんないろ／＼な光が遂には集つて大きな燄となる。其光景は恰も海といふ一種の天に太陽がまた顯れた様である。

風の吹く夜は、之とは異なつて波がわれて高くなり低くなり、轉げる、打合つて粉になる。これが丁度熔けた金のゆら／＼と光を發してゐるかの様である。波が岸にくだけると、波は即光の總で海岸をかざり小石までも光で鍍金される。

何が美しいといつて、此の如き海で大きな魚が波の上を飛び廻つて光の長い尾を引く程美しいものはない。波が光の炎を燃に立たせる、ボートの楫が暗黒の海面に火をつける、漁船の進むにつれて長々と尾を引く

のは、丁度慧星

が尾を引く如く

後の方は段々薄

らいで遂に消

えて仕舞ふ。實

に美しい光景で

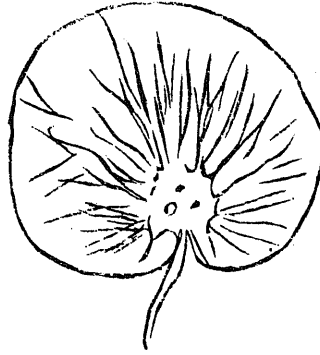
自然の美も此處に至りて盡せりといふ位である。

こんな光を發する動物はいろいろである。下等

の原生動物から、くらげ、人手、貝類、えびの類、

魚類のあるものは之等の光の原因をなすのである

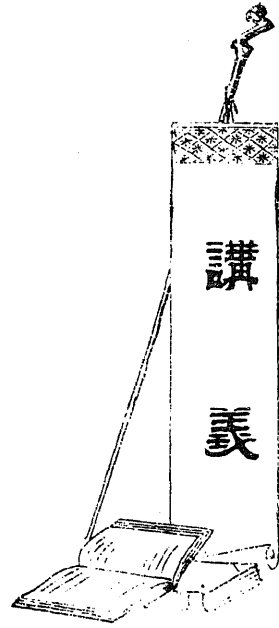
夜光貝



其中でも殊に名高いのが夜光虫といふ原生動物である。

日本などでは、前に述べた様な美観はないけれども、夜の海の表面に時々光を見ることができ。又手桶などに汲んできて、夫をかきまわすと、銀光のする光を見ることができ。この光もやはり前にいつた動物から出すのである。

今日では大に學問が進歩したので、こんな光を怪む者はないが、昔は其理由をよく知らないのだから此光は、海の鹽から出るので、鹽は精神を以て居る、この光は全く其精神から出るのだと思つて居た(終)



兒童研究法（承前）

文學士 松本孝次郎講演

聴覺に就きて

聴覺は普通の人の思ふよりは不完全な者が澤山あります。即ち百人中十九乃至二十五人は不完全であります。そうして其原因は熱病、カタル、咽喉及ユースターキ氏管の病氣などの爲に起るのもあり、又打たれること、耳をひつばること、非常の高音を耳の傍よりさかざれしこと、鼻汁をかむ

時に兩鼻孔を同時によくかみて鼓膜を害することなどにもよります。又聴覺は完全でも色に付て色盲といふのがある様に音をきゝわけることのできないものが澤山あります。

さて耳のわるい兒童はどんな有様であるかといふと（一）常に不注意であること、（二）何をすることもうそうにぐづぐづすること、（三）それろかでねぼえがわるく何もできないこと、（四）すぐに命令通にせず、躊躇すること、（五）甚しいのは常に口をあけて居ること（之は耳がなほると自然に口がしまります）などが著しいあらはれであります。

此通でありますから外見上性來がわるかであるか又は故意に人の命令をさかぬやうに見える兒童でも其實は耳のわるいのに由るものがあります。ですから兒童に普通と違つた様子があつたならば

聴覺が不完全でないかといふことをよく考へてやることに必要であります。殊に鼻、咽喉の病のある兒はよく耳の遠いものであります。

聴覺の研究上注意すべき事

高き音響の刺戟に由りて瞬きするは、何時頃よりはじまるか。又小兒が音響の刺戟に由りて醒むるは、何時頃よりはじまるか。一体幼兒の出生後數ヶ月の時に、其音響に對する感覺を檢査しようと思つたならば、次のやうにするのが最も簡便です。

即ち金貨、銀貨、白銅貨、銅貨などのいろ／＼の貨幣を、小兒に近い處で、通常二十センチメートルの高さより落し、この爲に起る音響で試験するのがよろしい。そうすると幼兒は重い圓銀を落した時には、其音響に由りて其方をふりむき、又は瞬

きをして、小貨幣をする時は、ふりむきも瞬きもしないことがあるのを發見するでせう。それが兒童が大きくなるにつれて、音響に由りて、どの貨幣が落ちたかをささるやうになるでせう。

兒童は、稍遠き距離の處で起つた強い音響に對して、頭を動かし、腕を舉げ、又は突然身を動かし、之に應ずることあるか。又は目を閉づることあるか。又は安靜でない有様をあらはすか。又は吸うて居つた乳を一時やめるか。

出生後最初の週間に、唱歌は小兒を慰むるか。又子守歌は小兒を睡らせるか。突然高聲を聞く時の、小兒の眼瞼の運動は、之を大人の場合に比ぶると遅速あるか。音響の爲に小兒が頭を轉する時は、よく音響の起り來る方向に向て轉するか。未だ知らぬ人の聲又は動物の聲を聞く時に、小兒は眼を

廣く開き居るか。母の姿を見ずに、聲ばかりを開
て、之を母の聲である、と認むるのは何時頃より
はじまるか。

音楽上の種々の音に對して、愉快の顔容をあらは
すのは何時頃よりはじまるか。鋭き音又は調和せ
ぬ音に對して、不愉快の顔容をあらはすのは何時
頃よりはじまるか。

遠方の音響は、どんな種類のものが、初めて小兒
に認めらるか。又最も屢認めらるゝは何であ
るか。小兒が屢聞く音響に對して、平氣で居る
のは何時頃よりはじまるか。小兒が自ら紙片を破
りて音響を發し、又は机を敲きて音響を發し之を
喜ぶのは何時頃よりはじまるか。

史傳



野村望東尼

(ついで)

下村三四吉

望東尼が平尾の山莊は、勤王の事歴と淺からぬ
關係ありき。かの方外の僧侶にて憂國勤王の念こ
とに深く、幕吏のためにつけまどはれて、遂に西
郷隆盛と共に身を薩摩の海に投してはてたる月照
師が福岡に來りしときも、同藩の月形、鷹取、平
野、早川等の志士がこれを誘ひて密會せるもここ
なり、平野國臣は、しばし尼の庇護によりて身
をこの山莊にひそめしことあり。また、月形、早

川等が西郷隆盛をここに誘ひて、薩長連和の端緒を開きたることあり。高杉晋作が、しばらくこゝに世をしのびて、尼の厚誼を受けしことは、前に詳しく述べたるが如し。望東尼が、藩の俗論黨に構へられて、幽閉の身となりつるも、かく平生勤王の志士に交はり、そをかくまへることさへわりけるためなり。國家のために力を竭して、奇禍にあへるは、もどより尼の甘んぜるところにして、「浮雲のかかるもよしや、ものふの、やまと心のかずに入りなば。」どの歌によりてもよくその心事を知るに足れり。さはいへ、思へば不幸のきはみなりけり。

望東尼が幽閉中の情況は、その手に成れる『比賣日記』のはじめに詳しく記されたれば、その中のところどころを左に引きて、彼をして自ら語

らしめよ。

はじめ幽閉せられしは、彼か自宅にて、ころは六月の末つかたなれば、暑氣はげしう人にせまりて、たださへ堪へがたきを、まして、

「ひと間にふしこめられて、親類どもかよりき守れば、いみじうあつけきに、庭にだに得いでず、軒にははる朝顔のみながめくらして、

物ふかく、今は思はじ、わさがはも、わさき色こそ、めでたかりけれ。

いつしか七月に入りて、三日月を見ては、

初秋の、まづ見をそむる、三日月の、影をへだつる、夜半のうき雲。

と咏じ、まどにはひかかりたる朝顔の種なれるを探りなどしては、

わさがはの、花より先と、わもふ身の、

こんどいさかん種をとりつつ。

と歎して、はや自らなき身なりとの決心をあらはせり。

「くもりがちに、あつけさも、過しがたげに、たれもいふめり。

ひどたびは、野分の風刃、はらはずば、

清くはならじ、秋の天空。

時事に比し來りて、感慨何ぞ深きや。

「十日あまりの月、れもやの家上よりいでて、むらの軒にもれきつつ、たごの水にさし入りたれば、

ただならず、新しき秋の月のみぞ、濁らぬ

水のころ知りける。

心事公明正大にして、一點のやましきところ、暗きところなし。しかも、世事宜の如くならず、暗

雲時に光明を蔽ふ。秋月の歌、誦し來れば、菅相公の筑紫謫居中の「海ならずただよふ水のそこまでも、清き心は、月ぞてらさん。」との詠に想到し、世を隔てて、兩者の境遇相似たるを悲むの念に堪へず。

奇禍は、尼の身の上のみならで、その僕童にまで及び、獄につながれき。蓋し尼の事に關して嫌疑を受けたるならん。尼は、これに切なる同情をよせて、

「めしつかひたるをどこわらはが、ゆくりなく捕はれて、ひどやにものせられつるこそ、あはれにかなしくも、はためぎましけれ。

わか竹の枝もよわきに、葛かづら、かかゝるは何のうらみなるらん。

「すぎにし日どらはれしわらはがゆるむされて、さ

とにかへりたりと聞きて、

わか竹にまどひし葛のうらどけて、吹き

かへしつる風ぞすずしき。

これのみこそ、このころのよろこびにはありけれ。

と記したり。尼が平素の用意は、これによりても見ることを得べし。

望東尼の孫助作も、祖母と同じ禰にかかりて、

共にその家に幽囚せられしことは、前に一言せり。

然るに、間もなくして、尼は、その家族とひき分

かたれて、更に里方にあづけらるるごととなりぬ。

哀しみの上の哀しみなり。

「うまこなるものさへ、おなじぬれぎぬにつつまれて、家のかたぐにうまれたりつるに、同じ家には二人あらんことさへ、かなはずなりて、わや

のすみにし故郷にうつしやらるるを、二人のうまごはさらなり、女どもみなかなしび、わびごどもすれども、かなはず。つひに、居待の月ともる共に、家を出づるとき、故ある扇のありけるにかいつけて、はしらにかけて、わかれます。

かへらでも、正しき道のすゑなれば、たれもなげくな、われもなげかじ。

など、心つよげに物したれど、のりものに乗りより、なみだせきあへず、いつのかごでにやとおもふに、うつつげもなし。

のりものの、おもひもかけぬをすごしに、居待の月を見るぞかなしき。

惨痛にして、胸さがるる心地す。かくて、遷されて、ふるさどに至れば、

「目なれにし故郷の庭もやうかはりて、月にかかやく露の玉も、身にふるこどいかばかりなぞ、花もふさへくるし。」

座敷囚てふものにたしこめて、猶、うから、やから、夜ひる、かはるく二人三人してぞ守れる。ここよりも、月のおもは見えずして、たい庭にてらす影のみこそ見ゆれ。かくれ家にもおしたりし、山邊の庵など、をかしき頃はひなめるを、かきたえて行かぬ間に、月のさかりも、過がたになりぬるなど、とりあつめてぞおもふ。

我がいはの月も、さびしど、すみぬらん、ゆきて居待の人もなれば。

「ゆふしでに、老がいのちをかけまくも、かしこき御世をいのる頃かな。」と、國家の爲に餘命をささげんと決心せし尼も、この景に對しては、さすが

に、久しくすみなれし山莊のおもひ出でらるるも、人情の常なりけり。(つづく)



文苑

古茂藏

露國 イバン、クリロフ 原作
日本 新保 磐次 続案

或る日乞食の古茂藏は門並み貰ひあるいて大分疲れたから、町はづれの道ばたに腰かけて獨言を始めた。

「世間の人はなぜあんなに慾張つてるだらう。立派な風をしてゐて一文や二文の錢を、快く呉れる者はない。」溜まれば溜まる程汚ないとは」

よく云つたものさ。あの横町の慾助などは別してひどい奴だ。あいつも一、頃は十分お錢を溜めたさうだが、賢いものなら銀行へでも預けて大丈夫にして置くのだ。處が、あいつめ、一時にドカリと儲けるつもりで、蒸氣を一ぱい拵へて、靴手船の商ひと出かけたところが、ドッコイそう旨くはいかない、船は難船する、荷物は沈む、イヤハヤ散々の始末で、やつぱり元の杻阿彌さ。

と云ひながら、蓬蓬と延びた鬚を撫でてわざ笑つた。

『そこへいっちや此の古茂藏などは慾のないものさ、ほんの今日食べて着てゐるだけあれば其の上の望はないのだ。併し、そんな正直者には中中福は廻つてこず、アア世の中はいやだい

やだ。』

と愚痴をこぼしながら、うとうと眠りかけると、

『古茂藏、古茂藏』

と呼ぶ者があるから、はつと目をあげて見ると、誰わらう、福の神の隊長大黒様が大さな袋を背負つて、にっこり笑つて立たせられた。

『古茂藏、そちがあまり正直無慾なゆゑ、金を投げて遣はす。』

古茂藏は寢耳に水ではない、寢耳に金だから、驚くまいことか、額を土にすり付けて、

『お有り難う御座ります』

大黒様はくつくつお笑ひなさつて

『これこれ古茂藏、そちは今日から金持になるのだから、其の乞食調子はやめるがよい。』

そこで其の面桶をここへ出すと、此の袋の金を

わけてやる。しかし、面桶の中に入つた金だけがそちに授かつたので、外へこぼれたのは、塵になるぞ、よいか、わかつたか。

『有り難う存じます、よくわかりました』

と古茂藏は天に歡び、地に喜んで面桶を捧げた。

『そんなら氣を付けろよ、そちの面桶は大分穢が緩んで居るやうだぞよ』

と云つて、大黒様は徐かに袋の金をおわけなさると、チャラチャラと音がして金貨の流れ込む心持、イヤハヤ何とも譬へやうがない。

『どうしや、もうよからう』

『どうぞ今少し……』

『底が抜けはせぬか』

『なかなか』

金貨の泉は再び流れ込む。面桶はだんだん持ち重

りがして、古茂藏が手はふるへ始めた。

『そちはもう是で國中第一の金持だぞよ』

『へいへい……エー申し兼ねましたが今少し、せめて一つかみだけ願ひたう存じます』

『こわれはせぬか』

『今少しくらゐは大丈夫で御座ります。』

金貨の泉が三たび流れ込むや否や、面桶の底がボンと抜けて金貨は土の上にバラバラと落ち、忽ち塵になつて仕舞つた。古茂藏はアツとばかりに目を覺まして、あたりをキヨロキヨロ見廻はし、

『アー惜しいことをした、それも大抵の處で銀行へ預ければよかつた。』

(完)

月前竹

東くめ子

月すむ宵の窓のへに 軒端の竹の影落ちて

吹き來る風に打靡ひく 姿も聲も涼しけれ

床 夏 全 人

庭のみは錦をしけり荒れはてし

宿にすきたる床夏の花

夕 立 須川 ゆき

來てみれば露にしをれぬ花もあり

野末は雨のよぎて降りけん

晚 夏 高木 四郎

月影はすめとすまねど秋やこぬ

なつやは暮れぬ中空にして

花 火 同 人

あはれてふ程もあらせず中空に

はかなく消えてのこる星影

蜻 蛉 同 人

空たかくわがれあまつよかしくも

なれ皇國の名にし祀へれば

鎌倉山の月 東 翠 水

今も尙かまくら山にすむ月は

あれにしあどをいかに見るらん

亡母の寫真に 秋 影

一言も仰せ給はぬかなしざよ

ちとせ見るともうつしゑにして

述 懐 鈴木金太郎

徒に草木とともにくちもせば

人どうまれしかいやなからん



説
林



幼稚園保母に望む

或人はいひます、幼稚園の保母などは何も教へるのではなし、高が乳臭い幼子を遊ばせて行くのが役割で、どうして學問も見識も要つたものではない。又或人の申すには、名が既に保母である即ち乳母である、だから保母といふ名前からして改良しなければ、どうしても幼稚園を重く考へさせることは出来ない。先こんなことを申す人が世間に随分ある様です。

これ等の言葉は表面通りに解釋しますれば、誠に淺白な言ひ分で、もとより取るにも足らない議論であるのですが、無論言ふ所の人は表面通りに意味してゐるのに違ひない。淺白極まる考へからして、一向取るにも足らない、こう云ふ議論を致さるゝは、夫は致し方がないとしても、肝心の幼稚園保母其人に、時どすると右の様な間違つた考へを持つたるゝ人がある様では、誠に容易ならぬことといはなければなりません。

何も教へるのではない、言はゞ乳臭い幼子を遊ばせて行くに過ぎない、勿論幼稚園は學科の智識を教ふる所ではありませぬ。然しながら智識を教へないからと申して果して學問も見識も要つたものでもないでしやうか？ 幼兒を遊ばせて行く、無論夫に相違がないです、けれども如何に深い意味が遊

ばせて行くこと云ふ語の中に含まれて居ましよう！
 ？實際に實物に當つての五官の練習、知覺力の練習、記憶想像の教育一言しますれば知識の啓發は言はず、人間生活に最重要なる習慣の形成といふ様なものが、頗る其要素をなして居ることを氣付かせぬか？習慣の形成！これほど大切なものが果してどこにありましようか？道徳といふ語も其原語をいへばつまり習慣といふ語で、無論今日でもそうなくてはなりません。習慣を形成するのは所謂乳臭い時が、第一番で、これが幼子を遊ばせて行く中に、最注意して得なければならぬ結果でしよう。善良なる習慣と豊富なる智識とは人生に於て何れも軒輊があらうとはいへぬ、否何れかを擇べといはるれば、私は寧前者を取らうと思ひます。これほど重要な結果を豫期せられて居る

子供を遊ばせることに於て、保母たる人が果して智識も見識も要らないと申されましようか？

又保母といふ名前がいけないと申すこと、これは或點から申すと如何にも穩當でない所もある様です。併したゞ前申した様な意味からならば、何れも別段氣にするにも及ばないので、名はたとひどうあらうとも其實國民を仕立てる上に於て、最大切な職務を盡されて居ることを自覺せられ、又社會もそこに氣が付けば一向構はないことでもございましょう。

そこで名稱などは、何でも宜しい。其實諸君は前に述べた様な最重要なる教育の一部分を負担せられて居るのであります。だから従つて夫に相當な學力と見識を備へなければならぬ。育児學宜しい、兒童研究宜しい、保育學最可なり、併れ

ども其他一般の科學殊に最教育學を研究しなけれ
 ばなりませぬ。從來の傾向を見ますれば、幼稚園
 保姆は先づ何を捨て、も保育學所謂キンデルガル
 テン、ペダゴギックをやらなければならぬ。
 所で此保育學と申すものうちには何人にも知る
 ことの出来ない、申さば幼稚園の虎の巻とも稱せ
 られる様な恩物の一科があります。是さへ通曉れ
 ば殆ど他の學科は、脩める必要がないかの様に考
 へて居られた。此傾向は強我國だけではありま
 せぬ、歐洲諸國で在つても矢張其通りなのであり
 ます。即教育學や心理學や体操や、こんなもの
 はどうでも宜い、何でも保育學さへやれば宜ひと
 申す様な次第で、此傾向がやがて保育學——幼稚
 園教育といふものを普通の教育から尤で特別のも
 のとして仕舞つたので、これが即總べての教育的

方面が既往半世紀間に於て曠々として發達進歩し
 たのにか、はらず依然として舊態を改めない譯
 であらうと考へます。

然るに幼稚園保育と申すも、矢張將來の人格を
 造るのが目的で、どうしても教育の範圍に在らな
 ければならないので、其根本的理法はどこまでも
 教育學の原理から割り出されなければならぬ。
 近來米國の一二の雜紙に見ゆる幼稚園に關する論
 争はやがて普通の教育學の原理と幼稚園保育の理
 法との衝突と云ふ此間の消息を窺らしたものであ
 りますまいか？此論争は何れ他日稍詳に御紹介
 する機會があらうと思ひますが、兎に角幼稚園保
 育法の理法は、教育の原理から導かれなければ到底
 底改善させる譯には参りませぬ。

幼稚園の保育法には到底改善すべき點が多い。

併るに五十年間も他に後れて、舊態の儘を存して居つたと申すは、つまり教育學者が幼稚園保育を知らず保母が教育學を度外にした結果に外ならぬのであります。幼稚園の効果は彼の淺白者流の申す様ではありませぬ、併も今日多數の幼稚園に於ては、其儘では頗怪しいものが多い。其改善すべき點は容赦なくどしどし改善して以て當然收めるべき効果を收めなければなりません。而してこの改善は即現に保母其人に俟たねばならぬ。そこで保母諸君に向つては是非とも他の科學殊に教育學の原理方法に付きて最十分なる研究をなされんことを望む次第であります。教育學を單に小学校教員の専有だと考へて、一向に其方に着目せられないのは、決して自家の職務に忠なるものは申されませぬ。

愚痴と

取越苦勞

愚痴とか取越苦勞とか聞けば、直に女といふことを思ひ起します。これは實際つまらぬ愚痴をこぼしたり、取越苦勞をしたりする女が多いからであります。

皆さんは、かういふことを聞かになつたでしよう。

「あゝこんどの入學試験に落第したら、どうしよう」

「あんなに、よくたのんで置たのに、なぜこんな大きなふきにしたでしよう、ほんとにしようがない」

「昨日お天氣であつたら何さんの家に行かれ

たのに、雨が降つた計りに、折角支度までして置て行かれなかつた」

これ等に似よつた事は未だ澤山あります。此等の事を何時までも、繰り返しくわけもなく言つたり考へたりするのは即ち愚痴なり、取越苦勞なりであります。若し一家の中に、こんな愚痴を言つたり、取越苦勞をする人がありとすれば果してどうでしょう、決して面白くはありません。

それは誰しも入學試験の前になつて、ことに志願者の数が非常に多い場合などには、落第したらどうしよう」といふことは一度は私もふかしれません。また、折角いひつけて置たことが、自分のいひつけた通りにしてなければ、「何故こんなことをして来たかしらん」と思ふでしょう。また、雨に降られて不都合であつた時に「雨さへ降らな

かつたら、この用事は昨日かたづいたものを、」とねもうかもしれません。けれども、只何時までも此の通りに考へたり、言つたり計りして居ても何の益にも立ちますまい。

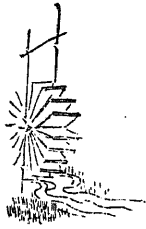
「こんどの入學試験に落第したら」とねもふならば、若し落第したら、今一度奮發して來年試験を受けようとか。それまでには、もつと、算術を勉強しようとか。音楽を勉強しようとか。一度覺悟を定めたら、それでよろしうございます。それに、いつまでも「どうしよう」と無暗にいうても、少しも益にはたちません。くしやくしと思ふたから、と言つて決して試験がよく出来るものではない。たゞひ、少しの間でも、つまらぬ事に頭をつかつたり、心を苦めたりすれば、する程、馬鹿らしい事でございます。それよりは、どうしたら

及第することが出来るか、よく考へて一生懸命に、その様にど、つとめるのが第一でございませう。また、人にものをいひつけて、其通りしてなかつた時でも、翌日も、また翌日まで同じ愚痴を繰り返すなどは、まことにつまらぬことでございます。それよりは、直にいつけた通りに直はさせれば、それで何も言ふことはありません。若し、さもなくて直はさすことが出来ぬ場合とか、出来ても直はさせぬと定めたならば、いふてもかへらぬことです。もう、それきり思ひきつてしまつて、次にさせるときに尙よく言ひきかせたら、よろしうございます。また、雨が降つて用事がかたつかなかつた時などに、愚痴をいふのは尙更つさらぬことであります。ふきのしかたが大きすぎるとかいふ様に裁縫のしかたのわるいのは、あ

どで、し直させれば、取りかへしもつきませんが、雨の降つたのはこれは何ともいたしかたのない事で、人の力に及ぶことではありません。つぶやいて、寸毫も益はありません。すべて女は物事に綿密で注意周到でございますから、何かするときに、只かるはづみには、いたしませんで「これをこうすると何うなるか」「あゝするとどんなになるか」など後々のことを思ひます。また、したあとで不結果にでもなりますと、直には、それを忘れてしまひません。「あゝあんなことをしたからかうなつたのか」といふ風に過ぎたあとのことをふり返へつて見ます。この後々のことを考へたり、過ぎたあとのことを省みるのは大切なよい事で、決して、取越苦勞だの、愚痴など、一口に言ふべきことではありません。取

越苦勞とか愚痴とかいふのは、何の益にも立たぬことを何時までも考へたり言つたりするのでありませす。つまり、安心したり、思ひきつたり、思ひ開いたり、することが出来ぬから起ることで極々馬鹿らしい事でございます。私共はどうかして、こんな馬鹿らしい事に大切な頭をつかつたり、貴重な時間を費したくないものであります。此互に、女は愚痴ほいものだとか「取越苦勞をするものだ」といふことを考へる人がなくなる様にしたものであります。

行水のすて所なし虫の聲



寄書



世の母たる人につぐ

埼玉縣 羽山好作

凡そ人間に教育を施すべき場所は、最初家庭に始まり、其の段階種々にして、小學校あり、中學校あり、大學校もありて、何れも肝要なりと雖も、就中兒童が家庭に在りて、其の慈母の膝下にある時程、最も大切なる場合はあらず。彼の樹木に就て之を視るに、其の初生の時に於て受けたる癩痕は、成長すると共に其の痕も、亦益々増大すると同じく、人も幼稚の時に受けたる性癖は、何れの

時に至るも決して蟬脱すること能はず。然るに世の母親たる人、多くは此の理を辨へずして、幼児保育の大切なることを知らざるもの、如し。即ち世間多くの母親たる人が、其の兒童を養育するの有様を見るに、唯之に飲食を與へ、衣服を給する事の外は、其た心を勞せざる者の如し。換言すれば、幼時に善良なる習慣と、善良なる氣質とを、育成するの最も必要なることに、何たる考もなく、縱令其の子の賞すべき事あるも、却て之を罰し、懲らすべき行あるも、却て之を稱揚する等、前後不都合の取扱を以て、幼兒に對するもの多し。此の如き狀況にては、到底幼兒をして、完全に保育すること能はず。實に幼稚なる兒童は、見る事聞く事、悉く其の母親のする所に摸倣せんとするは、自然に出づる性にして、其の母の賢

否は、直に以て其の子の賢否を表するものなり。されば、世に才藝人に勝れ、社會を益し、國家を富して、偉大の功業を爲し遂げたる人を見るに、皆其の母の賢良なるに依らざる者、殆んど稀なり。彼の兒童が慈母の膝下を離れて、其の齡五六歳に至るや、是れ其の習慣氣質の基礎、略定する時にして、一旦不良の陋癖に馴染することある時は、其の後學校の教育を以て、幾分か其の陋習を變換するを得べしと雖も、源泉の既に汚濁せるものは、到底末流の清澄を望む可からざるが如く、家庭保育の不完全なるより來る所の不良氣質は、學校教育を以て、悉く之を除去し得らるべきものにわらず。故に世の母親たる人々は、常に茲に注意して、幼兒保育の完成を期せざる可らず。實に母親たるもの、賢否は、即ち以て國家の盛衰を致す

の本源なるを以て、自ら其の本分を辨へ、十分に

之が注意を加へ、其の子の成長するが

儘に、放擲して顧みざるが如きことな

く、不良の習慣不正の心術を傳達する

が如きことなきを要す人誰か其の子の

賢明善良なるを欲せざらん。誰か其の

子の富貴榮達を希はざらんされば、世

の母として、幼児保育の任を負ふもの

は、須らく幼児を愛に溺れしめず、又

叱咤を加ふるが如きことなく、又虚言

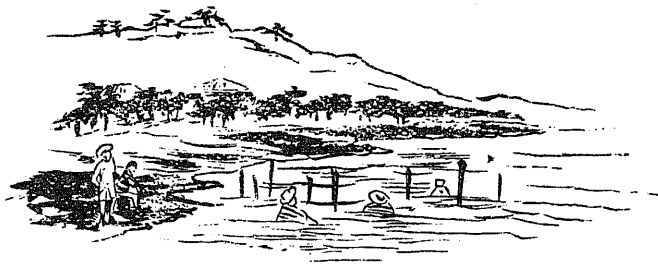
を爲して幼児を欺くことなく、不正な

ることは、見聞せしめざるやう注意

し、賞罰のことは、最も心を用ゐ常に

清潔と整正との習慣を養成するを要

す。



鈴虫やなき揃ふたる千草かな

余が實驗せる特殊

なる家庭と兒童(承前)

岩手縣師範學校

菅原文一郎

先づ酷いことには、この生徒が漸やく十歳であるが學校からかへると、まづその日の學校で教へられたことを復習し、夫れからあとは、四書とか五經とかを教へるといふことだ、活動の盛んな子供をして、二時間も三時間もついでにやるといふには、驚かざるを得ないのである、夫れで間々には、苦し

みにたへないで、かくれて遊びにゆくといふよ
 一な、事があれば、朝夕教への時ごとに、警を引
 いて訓戒するそーだが、大人でもひどいことを、
 活動の盛んな幼童にとりての事だから、いかに苦
 しくあつたかは、聞いたばかりでも驚いてしま
 ふ、併しかういふと、一概に祖父をあしくいふよ
 一だけれども、又この老祖父は、已に七十歳をこ
 え、餘命も覺束ないからして、どーか己の生きて
 居るうちに、この孫をして一人前の人にして見た
 いと、折角いうそーだから、只其の情の切なわま
 り、小供のため宜しくないとは知りながら、本意
 ならずも務めたであらうと思はれる、また學問と
 いひ、經驗といひ、すべてについて抜目のない老
 人だから、ひとり小供の體育ばかり冷淡であるど
 ういふことは、どーしても信ぜられぬのである、又

六十
 この老人か、一度も小供を叩いたといふことがな
 く、他所の人が悪戯したとて、小供の頭を叩くの
 を見ても、どーせ叩かば尻でも間に合ふものを、
 小供のためよろしくないなどいうて、家内の人た
 ちにも、時々注意するといふほどであつたとい
 うから、體育上にも決して冷淡でないといふ所が、
 充分氣をつけてあつたといふことを保證するによ
 い。
 あらゆる點から見ても、この老人が、小供を育て
 る上について、いかに心をいたためたかはわかるの
 である、先づ書物を讀ませても、飽きた時など
 には、裏の果樹園に連れゆきて、いろ／＼の歌や
 詩を教へ、夫れからまた來て讀む、夫れでも飽き
 た時などには、今度は勉勵の方便として一枚を讀
 んだならば、一厘玉（飴ニテツクリ菓子）を一

個づい興へるといふよーな約束をして、論語なり、孟子なりを讀ませるといふ熱心、兒童の苦しみは勿論だが、七十にあずる老人の骨折りも、なぐさみでは出来たものでない、そして一日に（放課後日々）七十五枚を讀んだのは、一番多くあつたなご、日誌にかいてあるそーだが、よくその小供にたゞして見たところ、讀む間、おちーさんは、虫眼鏡を以て守て居るからわからないけれども、友だちが遊びにとて誘ひに来て居るし、早くやめたいから、時には、おちーさんの側見したとき、そつこり讀んだふりして、三四枚をはねたこともあつたど正直にかたりました、折角家庭では、立派に育て、居るものを、かゝる言葉をさへ棄てにするは、所謂人の子をそこなうものだと思ひましたから、夫れはよくないねと言輕く注意しました

たが、この兒童の境遇にしては、夫れはわるいごまでは、どがめかねました。夫れから今一つ感服しない事は、他でもありませぬが、どかくこのおちーさんは、老體であるから、寒氣を感ずるからでありませよー、寒中寝るときには、布團を炬燵で焦げるほどあつく暖めて寝るといふのです、そしてこの孫も一所にねせられるそーですが、一方は幼い小供のごです、熱つくてたまらない、そこでそつと足をわきの方へ出して寝る、やがて足も冷えて寒くなつたから、中に入れる、そーすると折角暖まりて居るおちーさんにつめたい足がふれるから、おちーさんは驚いて目を醒ますといふやうな有様、わゝかゝる點からわの兒童をして、弱くしたなど聞くとき既に、口惜しくありました、その他よく聞いた

ならば、参考にするやうな事が、澤山ありましたらうけれども、先づ私のきいたのはかういふものでありました、此のれぢーさんにしてこの小供に適する體育を施されたならば、如何に圓滿な發達をするであらうかと、誠に氣の毒でたまりませんでした、かゝる育て方をへて来たのですから、學校に來て他の薪をさきり炭を負ふといふよゝな育て方の小供と同一視されて、活潑に活潑にといはるゝのも、なるほど苦しくてたまらなかつたでありましたらう、世の育児者には、兒童は温厚なるよりは、寧ろ粗暴に傾くほど活潑なのはよいといふて、弱い兒童をしてその依て來る所をも確めず、夫れ遊べ夫れ駈けよ、未來の日本軍人が、夫れではいけないなど、一も二もなく獎勵する人があるときいたが、勿論さうなけらねばならぬまで

はあるけれども、中には今のよゝな育て方の小供もありますから皆平等にやられたものでありませぬ、夫れだから一人の兒童にしても、その一言一行みな其の由る所を究め其の源から大に改良するとも、獎勵するともしなければならぬと思ひます、一向前後のまどまりもない事ではございませぬ、小供を育てる方々の、少しでも参考とならば、私の満足する所でございます(二元)

白露の色は一つをいかにして

秋の木の葉を千々に染むらん

富士南麓地方の子守歌

駿河 西村和一郎

一、ねんねんよー、かんかんよー、わしらんお坊ちやんを、誰が、かまつた、誰もかまひもせぬ

けど一人で泣くには、しよがない。ねると根方へ、くれてやる、起きると、興津へくれてやる、泣くと長持を背負せるぞ、ねんねんよー、かんくよー」

全 穂歌

二、向ふの藪で、光るは何だ、蟲か螢か、螢か蟲か、蟲でもないが、星でもないが、やましるねせんの二ッ子で、ござる二ッ子で、ござらば御供をませ、御供にはぐれて、だいがくちゆへ、一軒設けて、やけ家を建て。彼方を向いては、泣かれ、此方へ向きては泣かれ。父も母も、小石じやないか。わしらねせんに、くれたいものは櫛に簪、御髪のお、つけて結はして、後からみれば、髪が三寸、島田が四寸、先づ「一かん貸せ申した」

三、一や二や三や四のおみやのからくり、かきどの吉原茶碗すこのいて二つに、われる、どーしましよ。こーしましよ」

四、たんよー一つ打つけたんよー、二つぶつけたんよー三つぶつけたんよ、四つぶつけたんよ、五つぶつけたんよ、六つぶつけたんよ、七つぶつけたんよ、八つぶつけたんよ、九つぶつけたんよ、十どぶつけたんよー」

五、ねしろのさーの、おんさのさ、ねんさのらいしも、おてきでぶつとて、ねねぶりころんで、ね茶碗蹴からかして、いちーやはかくーいちーやさかどん、さいたかどん、しのぶかどん、どんどやの神さん、何の神さん、此處は船橋、箱根の一、二、三、四、五つもの姉さん友がないとてね尋ねなざる、友は丹波の助太郎様よ。助

けた土産に何〜貰つた。一にや、小箱、二にやまた手箱、三にやさし櫛、しのべの枕。五ばん簪、六ばん前垂、しめて七ばん、さやの帯、絨子の帯、先づ〜一かん貸せ申した」

六、ひめさん、とよさん、ひめさまへから、御手紙、参つたとして、何といつて参つたとして、今日、今晚、御日待やらうと向ふ見れば、白壁ずくしの、若い暖簾が、かゝつた〜私ら佐野屋の絹絲少女のおみね様にお渡し申しましたよ」

七、今日も、よき日だ明日も好き日だ私らが隣の惠比須講によばれて、行つたら、紅鯛の吸物、蒔繪の御膳で、柳の籠箸で、一杯吸はしよ、二杯吸はしよ。三杯目には、溢れて、こぼれて、御寺のდანから、お鼻〜鼻づかみ、ねびん〜びてなで、ねたげ〜

六十四
み、ねかねを附けまじよ、お紅を附けまじよ。御白粉を附けまじよ、先づ〜一かん貸せ申した」

八、ざくろ〜、つかみざくろ、ねしやく〜としめて、よをしめて、花は千咲く實は一つ毎朝〜手をたゝき、じ〜地拂ひや此の地を拂つて一匁」



九月の天地

まか生

昨日まで早苗どりしが何時の間に庭の芭蕉のね

ののきて、秋風の朝な夕なに身にし行頃となりぬ。

山中曆日なしとかや草深き山の奥ほど長閑なるものはなし。夙に起き柴の戸を出づれば、白露團々人の袂を霑ほし、風には、笑む萩、尾花、葛花、撫子、女郎花、桔梗、刈薺、藤袴、野菊、千屈菜、茅嫂根、蓼に鶏冠、五味草。

苔の細道踏みわけ入れば、深く潜める野鳩の幽暗き聲の洩れ來り、重陽の節句に菊未だ開かざれど秋菜黄やうく熟す。

麓の畑の路つたひ、小さき黒き眼をば熟せる粟の垂れし穂に注ぎて思案小首の鶉をば、驚さむも氣の毒とソロッと迂迴して溪の磧に轉ずれば、岩の上なる鶺鴒は聲朗かに波形に飛ぶ。

流に沿へる對岸の榛の梢に百舌鳥來り鳴き、山

噛み躍り跳ね廻り暴れにわれにし深水も岩間の淵に淀みては、中に游げる鱒をも數へ得べし。

松蟲、鈴蟲は露に鳴き、夜寒に秋のなるまゝに檻樓させどや蟋蟀の弱るか聲の遠り行く。

秋分の頃、燕は盡く南に歸り、鴻雁未だ來らず、風を切つて蜻蛉縱横に飛び蚊軍爲めに形勢日に衰ふ。

稻田萬頃金波洋々たる平野の間なる流をば、白帆斜にユルくどうねりて下る川舟に、騒くは蘆間の鳴か鷓か、沙魚、鰯など鮫に躍る。

浦の渚に白鷗の翔ける、磯の小島に鶉のやすむ、濱の漁夫の漕ぐ釣舟、海藻抱いてうれしげに家路に向ふ乙女子、竿を肩にし籠さげて歸る夕の漁翁、漁火滅えつ明りて遠寺の鐘の響幽なるに疑乃の聲。

月つきに月つき見る月つきは多おほかれど月つき見る月つきはこの月つきの
月つきいざや月つき見みん、月つき見みれば千ち々に物ものこそをかしけ
れ、我われ身み一つひとの秋あきにあらねば、げに月つきは我われ等らに對たい
して平び等とう無む差さ別べつなり、一いつ視し同どう仁になり。

山やまの端はの月つきよるし、平へい原げんの月つきよるし、海かい邊へんの月つき
可かなり、林りん間かんの月つき可かなり、高たか嶺ねの月つき、中ちゆう天てんの月つき、
雲うん間かんの月つき、雨う後ごの月つき、海かい上じやうの月つき、湖こ畔はんの月つき、しめ
りがちな有あり明めいの月つき、少すこしも見みえぬ新しん月げつ、鎌かまの如ごと
き三み日にち月つき鏡かみの如ごとき望もち月つき、水すい蒸じゆう氣きの爲ために朧ろく月つきとなり、
晴はれては千せん里り一いち望ぼう仲ちゆう秋しゆうの満まん月げつとなり、見みる人ひとの心こころ
心こころに任まかせられて長ながへに清せい涼りやうの感かん想さうを起おこさしむ。
秋あきどしいへば、棒ぼうの轉ころがりたるにも弱よわ音ねを吐はく
は唐たう人じんの得ぞう意いとする處ところなりき、今いまの日にち本ほん國こく民みんは骨ほね
と皮かわにて造つくり泣な言ごんをいふ爲ために現あられ出いたるものに
非あらず、石いしにて造つくり唯ただ名な利りを貪むさぶる爲ためにのみ生うまれ來きり

しものにも非あらず、我われ等ら日にち本ほん國こく民みんは剛がう毅ぎ宕たう落らく堅けん忍にん不ふ
拔は勇ゆう往わう敢かん爲るの國こく民みんたると同どう時じに物もののあはれを解かいす
る健けん全ぜんなる國こく民みんなり、又またならざるべからず、

聲こゑかれて猿さるの齒は白しろし峰みねの月つき

瀛しん車しゃ旅りょ行こうと道みち連づれの幼よう兒に

ひ さ 子

皆みな様さまはいかゞですか。私わたくしは汽き車しゃ旅りょ行こうが大だい好こうで、
あわてゝ送おくり迎むかふる山やまや、川かはや、海うみや、家いえや、人ひと
や、電でん信しん柱ちゆうや、畑はたけや、スステスースシシヨヨンンに逢あひます
ど、誠まことに心こころ持もちがよく、まして列れつ車しゃ中ちゆうには、種しゆ々じやく様さま
々々の人ひとが乗のりり込こんで、いろ／＼の話はなしをして居ゐります
から、これを見み聞きするのまたしかに一いつの樂たのしみなの
で、只ただ一ひとの機き關かん車しゃが、一いつ社しゃ會かいどころではないいろ
んな社しゃ會かいの人ひとをひつばつて走はしる、と思おもへば文ぶん明めいの

利器といふものは、誠に便利で、そうしてれもし
 るいものと思ひます。併し瀟車に乗る人皆が皆
 私のやうな氣樂な考を持つては居りませ
 い。或は急用をかへて氣が氣でない人、親の危
 篤とさいて心も空に瀟車の走るのもれそいとかこ
 つ人、又は久しぶりで國に歸らうといふので活氣
 と喜にみちた人、電信柱のいかにも急いで後に
 走るのをよろこぶ幼兒、まはりの景色のつけさ
 せに變化するのが只れもしろい幼兒などもありま
 せう。つまり乗つて居る人の心は實にいろ／＼で
 ありませう。すると瀟車はいろ／＼の人いろ／＼
 の思を載せて走る車です。
 私は此夏休に新橋から東海道を瀟車で走りま
 した。そうして一人のかわい、小道運を得まし
 て、其御蔭で一層愉快に旅行をいたしました。

まづ程ヶ谷から一人の四十才位の洋服を着た日
 本婦人が、其子らしい七八才の女兒を連れて私
 の居る列車に乗り込みました。阿母さんは英語ま
 じりに其子と話をして居ります。私は幼兒が大好
 ですから、どうか此兒が傍に來ればよい、と思
 て居りますと丁度私が窓際に居つたのですか
 ら、此兒は度々チヨロ／＼と私の傍に來ては窓
 の外をのぞきます。そこで私は持つて居りまし
 た雑誌を出して「此畫を見せて上ませう」と申し
 ましたところが、其兒は無邪氣に寄りそうて來ま
 した。これで私は此兒と親しくなりました。
 〳〵の話を書きました。
 此女兒は今年八才で、父母の布哇のホノル、に
 出稼中に生れ、父は昨年ホノル、で亡くなり、母
 と二人で昨日横濱に着き、これから郷里の山口縣

に歸るといふ話です。ですから此兒は日本人では
ありませんが、生れも育ちも布哇で今度はじめて日
本の地を踏んだのであります。

此兒は私の間に對して極快活に、そうして年
齡の割合に、たしかに話をいたしました。

ホノル、に居る間は、午前は西洋人の學校に行
き、午後は日本人の學校に行つたそうで、日本語
も英語もよく知つて居ります。簡短な問を日本語
で出しまして、「英語で返辭をして頂戴」と申しま
すど、流暢な辨で正しく返辭をいたします。大人
の私大にはづかしく感じました。今度は私が
紙と鉛筆を出しまして「何かかいて頂戴」と申し
ましたところが、下にあるやうなものをかいてく
れました。

此書はホノル、に居つた時の此兒の家で、家の

下の方に何かぶらさがつたやうなのは階段、其上
に長四角なのは戸、黒いポッチはとりて、家の右
にあるのは木だそうです。

次に私は突然あなたはこの國の人ですか
と問ひましたらば、「私は日本人」ときつぱり答
へました。それから私は「日本と布哇とどつち
がいののです
か」「どつちが
賑ですか」「ど
つちがすきです
か」「どつちがよ
いのでせう」など、日本と布哇を比較した問を
出しますと、此兒は一も二もなく「日本の方がい
い」「日本が賑です」「日本がすきです」「日本の方が
つよい」と答へます。何でもかでも、日本をよい



(寫 縮)

方に言ふのです。此兒は生れてから、やつと昨日
 はじめて日本に來たのに、日本を最負すること此
 通りです。之は全く常に父母が家庭で日本々々ど
 いふものですから、まだ見ないさきから自然に
 愛國心がしみこんで居るものと見えます。

私ほもつと、此兒と話し、進で阿母さんにも
 きいて、内地で育つた兒と、外國で育つた兒とど
 んなにちがふか、布哇の家庭の有様はどうである
 か、知りたくございせしが、やみがたい要事の
 爲に私は東海道或驛で下車しましたから、殘
 念ながら此かわい、道連と打角御なじみになつて
 から、三時間許でをし別を告げました。あ、此
 兒今は何をして遊んで居るでせう。

名月や取つてくれると泣く子かな

女監を觀る

澤 生

南して幼年監に至り（茲には省く）參觀終りて
 炊事場を視る、四間に五間ばかりの場内に、三個
 の大鍋の中なる引割の半麥飯よりユラ／＼とさし
 昇る蒸氣の加減を見まもりつゝ薪もちたる二人、
 一方に幼囚、男囚、女囚、外役囚、にとそれ
 くの分量にはかりさりて小桶に飯を入れるもの
 三人、冬葱の味噌壺を丸き曲物に挿み入る者、
 患者の爲にとて牛肉のタタキの梅干大のもの三個
 宛を器に配分するもの、片隅にて餘念なく澤庵を
 切り居る者など、總て十數人の男囚徒等は四人の
 看守の指圖にて働き居たり、例の看守長は一々此
 等の説明をなしくれて終りに澤庵一ト切をとり上

げ指して其美味を誇られたりき、獄内衛生上の注意の至りて行届きたるは見るにつけ聞くにつけてかへすくも豫想の外なりき、炊事場の北の戸外には二人して井戸より水汲ぐものあり、又其傍なる室にて車を轉じて麥を引割るもの二人あり、皆終日殆んど休むをなく立働きたつゝあるなりと聞く、看守長の話にては、此處に使役する男囚は逃走の虞なき至つて従順なる者のみなりとのとなりしかども尙女囚に比ぶれば何處どなく活氣ありて無邪氣なるやうに思はれたり、されどわれには絶えず一種言ふべからざる感慨の胸中に蟠まるありて廣き境内を狭く薄暗さ心地しながら炊事場の參觀亦終る、時に午後三時半なり、乃ち第二の門を出で、再び樓上の應接所に歸りぬ。

先刻の典獄再び出で來りて、學校長と犯罪と教

育との關係につきて談話せらる、われは當時既に瞑想の淵に沈みて閉ぢたる我眼に歴然として再現し來るものは監房内の凡ての光景なり、笑ひて築きし長堤は何時しか崩れてあはれ堰き止めたりし紅涙は今や一瀉千里の勢を以て溢れ來りぬ、曰く「罪は故殺謀殺放火強盜竊盜なり人は豈人にあらざらむや」と、之を要するに良心の感應鈍くして因つて以て大膽不敵の行爲に出でたる精神病患者の外は、大抵邪慳深く思慮に短にして先見に乏しく、劣等の感情に激せられ易くして意志の薄弱なる等の原因により其畢生を誤り此悲惨の境遇に陥りたる者共なり、されば彼等も人としては人なり、豈盡く彼の毎朝の裸体の門越を以て面白しとせず者のみならむや。罪なき我兒を罪人の住居に産みて其兒に終生不滅の汚名を與へたるは彼

等と雖何ぞ之を以て此上なき愉快なりとなすもの
 のあらむや。病み細りて此世からなる餓鬼かどま
 がふ四十五六の女が線金の如き指もて糸つなぎ居
 たる、果敢なき命は風前の燈火の如し、彼何ぞ自
 ら糞ひて此處に居るをななさむや。誰か好まむや
 二十前後の弱齡を以て一朝の燃ゆるが如き心の煽
 に煽がれし過より紅衣細帯して終日機にかよびか
 りて極めて乾燥無味なる機械的の勞動に嚴重な
 る一定の制限を屏へられて傍目もふられす苦まむ
 とを、彼は果して將來に何の希望を有するか靜に
 思やるべし無期徒刑の四字を。わきて六十路を越
 ゆる三つ四つなるが世にあからさまに立つならば
 可愛の孫の莖菜蒲紫英を左手になして右手は菜の
 葉にとまれる黄蝶を追ふをまもりて樂むべし其老
 の眼をこすりもて此處に縋繰くり居たる、あはれ

其めぐる紡車の無常の風は何時か此老女の身の
 上に吹かざらむや、彼何ぞ喜んで此處に居るもの
 ならむや。

さるに彼等は揃ひもそろひて一生懸命に働さく
 らせり、われはいたく怪みぬ、彼等が將來に些少
 の希望もなくして此乾燥無味なる勞動に欺くまで
 に熱中するとの何故なるかを。彼等は果して何と
 も感ぜざるか思はざるか、否、否、感ぜざるに非
 ず思はざるに非ず、唯感じて思ふども何の益なけ
 れば……益なき憂き思せむよりは寧ろ夢中に働さ
 て其日その日を成るべく幻のやうに消費せむとす
 る憐むべき念慮に支配せられて居るなり、切言す
 れば彼等の無我夢中になりて忙はしく働くは只管
 墓に向ひて近づくかむとあせるものなり。

彼等既に此心を以て毎朝彼の工場の如來に對す

豈多少の得道せざらむや、發心せざらむや。

試に問ふ、蟲聲唧々として鼓膜にきり入り何處の落葉にやハラ〜と窓外にひとひ來る秋の夕暮に日中の劇しき勞働に疲れて茫然たる時、朔風戸隙を衝きて侵入し紙の如き一片の蒲團に鐵窓を射來る寒けき月影を止むる夜半に暖ならぬ床の夢醒めし時などには、彼等は果して刃を人に加ふる心あるか、毒を人にあふがしむる心あるか。怒つて放火する心萌すか、強いて掠奪する心起るか。嗚呼何ぞ夫れ然らむや、かるが故にわれは其罪を惡みて而して其人の爲に悲しむ。

若夫れ再犯三犯八犯九犯十四犯十六犯して監房内に此辛酸を嘗めて尙且つ改心するを能はざる精神病患者に至りては更に惻隱の心に堪へざるものあり、彼等は等しく人に生れながら何故に斯く

までも邪欲の惡魔にからまれて以て人らしき人として穩かなる生を享くるを得ざるかを思へば惻まざらむと欲すとも惻まざるを得ざるなり。況んや彼等の多數は先天的に斯かる悲むべき精神病患者なるに非ずして殆んど凡ては此先天的なる些少の萌芽を不幸なる境遇、殘酷なる社會の狀態が助け長じたるものにて所謂智なり情なり意なりの闕典によりて漸次に此惡性なる慢性病を馴致したるものなるに於てをや、更に聞かざや彼等八十九名の中に辛うじて己が姓名をだに書くを得るもの僅に四名にのぼらざると、われは強ち文字上の識不識によりて直ちに教育の有無を測定せむとするものに非ず、又教育は必ずしも犯罪を減ずと唱ふるものに非ず、されども眞の教育らしき教育の全く彼等になかりしとは其犯罪の大原因なりしと

を確認して疑はざるものなり。

近來女子教育の氣運再び勃興し全國到る處に私の高等女學校の續々として設立せらるゝものあるを見、都下には又更に各種の女子専門學校の設立の計畫あるを聞き、殊に女子大學の設立を見るに至れるとはわれ等の誠に慶賀する處なれども、實際彼高等女學校女子高等専門學校女子大學等は是唯社會の上流に立つ一部の人の爲のみに非ざるか、眼を轉じて廣く一般下流の最多數の婦女子に至りては果して如何、彼等は普通教育の門戸をだに窺ふ能はざるに非ずや、徐ろに社會の光明なる表面と暗黒なる裏面とを觀察せむか、誠に多言するに及ばざるものあり、同胞四千有餘萬あり、確かに二千有餘萬の女性あり而して最下流の憐むべく悼むべき女性決して少なきに非ざるなり。

既往に鑑み、將來を推せば、今の社會には經世の熱血、救民の紅涙、とは唯文字の上の事ならじ。

われは今更に此限りなき感慨を惹き起し、監獄を訪ひしを悔み、一行が對談終りて典獄及兩看守長に謝して各自應接所を退き始めたるにはなかくにうれしき心地ぞせられし、辭して出づれば中庭の柳條微風にもつれて一株の山櫻今將さに綻びむとせり、感慨ますく極りなし、黒門を出で遂に歸れり、時方に午後五時なりき。

(完)

此參觀の後年餘、われは旅の空にて聞きぬ、彼熱誠なる典獄は不慮の災にかゝり突然歿せられしと、こゝに又二年故人を追想して一層憤懣の感に堪へざるものあるなり、

(辛丑の秋附記す)

印度土人の家庭生活 (承前)

Y I.

で、印度に於きましては毎年社會改良に關す

る大會がひらかれました、小兒寡婦の逆境に付
 き種々協議されるのでありますが、唯だ少ばかり
 の改良された家庭では小兒寡婦の境遇が餘程まし
 になつて居ますだけで、改良進歩の意見に感化せ
 られた者は誠に小數でござります。そこで婦人が
 教育せられるようにならなくては、眞誠の社會改
 良とか進歩とかいふことは、到底行れないとい
 ふことは誰にでも明白に分つて居るのでございま
 す。

印度の家庭では婦人が大なる勢力を持つてゐます
 ことは、前に御話しいたしました事から御分りで
 しょうが、印度の婦人達は年齢と經驗とを積むに
 従がひ随分尊敬すべき品性を暢發いたしましたして、
 たゞに優た訓練家となるばかりでなく、屢々熟練
 な實際の事務家となり得ます。所がこの婦人達は讀

み書きすることは男子の仕事であると見做して、
 自分らは少しも之をなさないので立派に生活して居
 ます故に若し一家内の男子が女兒にも讀み書きす
 ることを、教へなければならぬなど云ひ出しま
 すと、婦人達は夫れを以てほんどうに耻づべき事
 だと思はないまでも、大低は馬鹿げた冗談として
 嘲笑つて居ります。一家の婦人達がかゝる態度を
 取て居ますらうは、男子は所詮如何とも致しかた
 がないのでござります。

併しなから、幸なことには諸所に於て改良事業
 が熱心不撓の精神を以て、奮勵せられて居ます、
 私の郷里なるブーナの町の印度國民協會では、
 十年程と前に二三の改良されたる家庭に於て、學
 塾を開きまして其學課目は國語の讀み方、文典、
 作文、算術、家政簿記に關する暗算、歴史、地理

英語、梵語、及び衛生大意などでありまして、ブ
ーナ町の委員が毎年一度試験をいたしまして、凡
ての家庭の學生に證書と賞品とを與へることにな
つて居ます。

最初の家庭學塾は十三名の婦人を以て始めまし
たが、他に多くの熱心な志願者がありまして又同
町の他所にも開く様な事になつたのでありまし
たが、この塾に參ります婦人達は悉皆結婚した
る婦人或は寡婦でございまして、多數のものは子
供があり又た家政の務のある婦人達ですから、好
し印度從來の妄説が十二歳以上の女兒に學校に行
くことを禁じないといたしまして、此婦人達は
到底普通の學校に通ふことの出来ない人をなので
ございす。

この家庭學塾がよく整頓いたしてから、まだわ

づか二三年しか經ちませんけれども、眞正の需要
に適合いたしたやうで、將來確かに増加する望が
ございす。此學塾に參りますもの、外に又各
自分の家庭で獨學して居るものもありますが、

斯ういふ人達はいづれ多くの教授をうけることが
出来ませんから大變な損であります、夫れに又試
験の時期が近づきますと、全學課はどても一度に
準備いたすことは出来ませんけれども、勉學しま
した丈の學課に付て試験をうけることを志願いた
します。夫でかやうに自宅でも熱心に勉勵する
よるな人々は、出来る丈獎勵して行くことは好ま
しいことですから、此志願は許可されます。この
試験は學生を責め苦しめるのでなくつて、反つて
大層樂しませて居るやうに見えます。或るとき試
験の終りに當つて殆んど一番に試験をなしをへた

一人の年若き婦人は、まだ自分はほんの小兒らしく見えて居りましたが、前に進み出て「來年も亦尙はいちすこし進んだ學課を學ばせて下さい」と願ひ出ました、で、なぜなほ進んで學びたいのかと尋ねられましたとき、この婦人は「私の男兒がいま成長して學校に行くやうになつたときの助となる爲めに」と答へました。又他の婦人らは保育看護のことを習ふため、尙ほ他のものは今よりもつとましな良人の内助とならんために學問して居るのでございます。かゝる感情が源動力となつてこの婦人達をして家政上の思慮と妨障とがあるにも係らず、熱心に不撓に勉學せさせたのであります、が、二三年前から種々悲しむべき災禍が引續きました爲めに、我々の大に進歩せしめんとして居た計畫は、不幸にも非常な妨を受けました、

併しながら又々よい時節の來ることを望んで居ります。そこで我々が前途大に望を屬して居ることは、この印度國民協會のブーナ支部會が大に奮發して十分に盡力いたし、この學塾をしてだんく増加させ擴張させて、印度の風習が大に改革せられない限りは、いつまでも無學不文に終らなければならぬ幾千萬の婦人達に、簡單にして、しかも實用的な智識を興へる方便となしたいのでございませう。

印度に於ける女子教育は、印度人の親切で忍耐ふかくつて快活である天性をば、反つて不正に反射して居る家庭生活の不愉快な方面を、改良するに至ることは無論確實であるといたしても、爰に又今一ツの難問があります、このことは印度にのみ居る改革家の氣付ないこととして、我々が英國

にきて、皆さんの家庭生活の情態を拜見いたさな
 いうちは、少しも心付かないのです、これは我々
 印度人は極幼少の時を除くは男女相離別する風習
 のあるために、どれほどの幸福を失ふかといふこ
 とでございます。英國のように凡ての家庭に於て
 一般に食事のとき又はその後には男女が相會するど
 いふことは、印度では出来ないのです、いつも男
 子と男兒とは一方に婦人と女兒とは他方にチャ
 ンと相離れて居るのですから

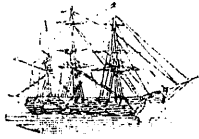
印度の青年男子が英國に参りまして數年を過す
 うちには、英國の社會と家庭とに親しく接しまし
 て、高等教育をうけた婦人達とも屢々會合するに
 從ひ兄弟姉妹從弟妹かよび凡ての青年男女は、ど
 れほど善い友人となることが出来るかといふこと
 を自覺するのでございます、それからして愛する

人々の待ちわびて居る印度の家庭に歸つて見ます
 と、どうでしょう、此方では不幸なる妄説の行は
 れて居るために家族も社會も丸つきり男女といふ
 二つの群衆に別れて居るのです、斯ういふ風です
 から、その毎日の生活に於て男女が互に全体の幸
 福を計らふと思つて自分の出來得る才力を盡して
 初めて成り立つ所のいふにはれない快樂興味と
 いふものは、全く奪はれてしまうのでございま
 す。

終りに望んで別して皆さんに御願ひ申したいこ
 とは、皆さんがどうか、印度に於てなほ進んで教
 育を受けることを望んで居る婦人らと又社會の風
 俗改良のため、御同情を表していただきたい
 ことでございます、英國からの御同情といへば印
 度では大層有りがたがつて受けるのであります

が、若しそれが實用になる書物だとか學校道具だとか常品又は贈物などでございますならば尙更のことで、皆さんはこの遷化の時期に於ける我々印度人の事業を、最も歡待すべき方法でもつて助力して下さることになるのです。斯様にして我々の計畫を御心に懸けて御同情なして下さることは、とりもなほさず、我々の尊み敬ふべき女皇に對しては同じく臣下たる東西の人民の結合を一層堅固に確實に接合せしむる爲めに御助力なさるのと同じ譯なのでございます。

(完結)



●本誌口繪の解

原壽は米國ワシントン府國會

議事堂内にかゝれる有名の畫家ダブルユー、エツチ、パウエル氏の揮毫になれるもの、十萬弗の巨額を費やして完成せる有名の油繪にして、千八百十三年九月十三日エリー湖上の戰爭に當り、敵艦の巨砲轟々たる響と共に雨下し來る間に立ちて悠々として、既に戰鬥力を失へる旗艦ローレンス號より其軍旗をナイアガラ號に移さんとしつゝある水師提督ペルリの剛勇を書けるものなり。此戰爭は見事ペルリの勝利に歸したるが『吾等は敵に遇

ひ申し候、而して彼等は吾等のものに候」といへるペルリより司令官への簡單にして飾りなき報告は九十年後の今日尙美談として人口に膾炙する所なり。過般相州浦賀に於けるペルリ渡來紀念會に際し盲啞學校長小西信八氏より原畫の寫眞板を送られたるに付早速前號巻首に入るべかりし筈の處、印刷の都合によりて本號に掲載することゝなしたるなり。

●東京府教育會附屬幼稚園保姆傳習所卒業式

同卒業式は愈々去る七月二十八日午前八時より第一高等女學校に於て舉行せられたり。中村所長の學事報告に次て卒業生四拾名に證書授與の後、全所長の適切なる告辭あり岡部會長の祝詞來賓の演說卒業生總代野澤い子の答辭ありて全十一時式を卒へたりといふ。

●日本女子大學校

同校にては、現今在學生大學部と高等女學校を合せて五百餘名、國文家政の兩學部は殆んど満員なるも、英文學部は、本科豫科共缺員あるに付高等女學校卒業程度の學力あるものは、九月上旬臨時試験の上、入學を許可する由、又附屬高等女學校に於ては、各級共多少の缺員あり殊に第五年級第三年級には十數名の缺員あるに付本月上旬補缺入學を許す筈なり。

●臺灣の學校

目下臺灣全島に於ける官公立學校及び其職員生徒最近の統計左の如くといふ

學校名稱	校數	教員	生徒	卒業生
國語學校	一	二八	一六六	三六
同附屬學校	三	二七	七三六	五七
師範學校	三	二四	一九七	……
同附屬學校	一	二	五七	……
國語傳習所	二	四	一一一	一〇
同分教場	六	一一	四三二	……
小學校	一一七	三五二	四五六六	八一

公學校

合計

一〇〇 四四 九四六 三〇

文部省留學生 今回の派遣留學生は凡そ三十

名ほどにして本月中旬までには發表せらるべしとのことなり。

慈善旅行 慈善旅行といふこと一度時事新報

によりて卒先せられしより、頗世の慈善家の注

目を引くに至りて各所に舉行せらるゝに至れるは

喜ぶべし。先月二日には福田會育兒院の野州鹽原

に該旅行を催せるあり、先々月には神戸婦人會の

全市全体より百名の兒童を擇びて舞子に向ひたる

あり、日本鐵道會社は前者のために瀛車貨を三割

引とし、山陽鐵道は特に後者のために貨錢を寄附

したりとのことなり。

高等教育會議議員 高等女學校校長の互撰にか

ゝる前議員河原一郎氏滿期に付改撰先月九日開票

の結果左の二氏當撰したり。

東京府第一高等女學校長

二十四票

伊藤貞勝

京都府高等女學校長

二十一票

河原一郎

海外彙報

獨逸皇太后陛下の崩御

獨逸皇太后フリードリッヒ

陛下には先月五日崩御あらせられたり。右に付き

我天皇陛下には親しく御弔電を發せさせ給ひぬ。

抑々全皇太后陛下は、故英國女皇ウキクトリア陛下

下の皇長女にあらせられ、千八百五十八年十八歳

にて當時未皇子たりしフリードリッヒ第三世と御

結婚遊ばされしが、全帝は即位後間もなく御崩御

遊ばされしたため、皇后には御齒四十八才にして寡

婦たるの不幸に遭遇せられ給ひ爾後十三年本年六

十一歳を以て遂に御崩去遊ばされしなり。同國皇室の御歎きは申すまでもなく國民一般の悲痛左こそと察せらるゝなり。

●酒癖に對する心理研究 獨逸のバートリツジは酒精の心理と題し酒癖に關する心理的研究の結果を掲げたるが其内飲酒せんとする情念の起るを下の如く分類せり。

- 第一 罪惡苦痛を脱せんか爲め、第二 生存競争より生ずる苦痛及び神經衰弱を脱せんとするもの、第三 細胞體の酒精中毒より生ずる空服を癒さんとするもの、第四 動物的情欲、第五 習慣の爲めに嗜好するもの、第六 放恣より生ずる第二の天性、第七 精神上に變更を與へんとする觀念、第八 コンモンセンスを個人的意思に變ぜしめんとする希望、第九 精神的進化より生じたる

副産的天性。

(婦人衛生會雜誌)

●胡索兵の子守歌

胡索克兵の勇敢なる馬蹄の

到る處天下風靡せざるなき勢ひなるが彼等が常に兒童を教育するにも力めて勇武の氣風を養成する爲め其子守歌に至る迄何れも尙武の氣風を以て充され居る由にて近刊の雜誌黑龍は左の子守歌を紹介せり

第一句 眠れよ眠れ能く眠れ、今こそ眠れ汝の父

の武勇に敵する敵はなし四境靜かに事もなし眠

れよ眠れ能く眠れ、

第二句 眠れよ眠れ能く眠れ、神は汝が爲め武勇

なる父を與へて安らかに汝が成長を守ります眠

れよ眠れ能く眠れ、

第三句 眠れよ眠れ能く眠れ、汝が育ひ立ちて初

陣に出で立つ時のかざしには母が送らん其花を

眠れよ眠れ能く眠れ、

第四句 眠れよ眠れ能く眠れ、汝が戰場に打ち向

ひ敵と戦ふ其時は花々しくも戦ひてあの父の子

と呼ばれてよ眠れよ眠れ能く眠れ、

第五句 眠れよ眠れ能く眠れ、若しも軍の拙なく

て今を限りとなりもせば子故に迷ふ親心思ひ出

でてよ然かあれど死に勝る名を忘れずに眠れよ

眠れ能く眠れ

●天才は長子に多し といふ標題にて、近刊の

萬朝報に外字新聞より左の一項を譯載せり。本

紙前號所載の秋山國手の談話と相對照せられなほ

面白かるべし。

露國の學藝雜誌に掲ぐるアクセソフヘルド教授

の報告に據れば世に天才英智の人と呼ばれたる

もの、中、五分の三は長子にして他は二子三子

末子多く、兄弟の中位を占むるものは殆んど皆

無なりと云ふ、而して長子にして名譽を天下に

博したる人々はシヨツベンハウエル、ルーテル、

ダンテ、ラファエル、レオナルドヴァインチ、チ

ヤーレス大帝、アレキサンダー大帝、孔子、デ

ーテ、ラブリエール、マホメット、ダラムベル、

バックル、ベスタロツチ、ロツチニ、ミルト

ン、バイロン等なり又ミケエルアンゼロ、サヴ

オナローラ、プラトリー、シエークスピア、タ

ツソー、マチニ等は二子或は三子にしてフラン

クリン、ヴォルテア、ロイオラ等は末子なる由

なり。右に就きて教授は曰くこは生理的原因を

以て説明し得べきことなれども、今之を説明せ

ず只此現象は偶然のものに非ずして、自ら法

則あることを忘るべからず。

新刊紹介

●日本遊戯唱歌 第三篇 鈴木米治郎編

●教科幼年唱歌 第二篇上卷 納所辨治郎共編 田村虎藏編

●皆共に幼稚園尋常小學校に於て採用すべきもの、

前者は遊戯をも并せ載せたり、何れも近來の出版

として材料の種類、配當等よく注意せられたるが

如し

●わけげの集 全一冊 月の桂の舎氏著

わけげの會に於ける新派和歌を集めたるもの、体

裁も優美に出來たり。面白きも中々多けれど、又

吾等の意に解せぬものも多し、所謂新派の新派た

る所なるべし

尙新刊の紹介すべきものは次號に譲れり

新刊雜誌

女鑑 第二三二、三號

わんな 第六號

姫百合 第三卷第六號

うらにしき 第一〇五、六號

女子のさも 第九四、五、六、七號

日本婦人 第二〇號

家庭 第七號

教育學術界 第三卷第三號

日本之小學教師 第三卷第三一、二號

教育時論 第五八四、五、六、七、八號

兒童研究 第四卷第三號

東京市教育時報 第一〇、一一號

哲學雜誌 第一六卷一七三、四號

女學之枝折 第二期第三號

東洋哲學 第八編第八、九號

婦人衛生雜誌 第一四八號

考古界 第一編第二號

婦女新聞

國光社

大日本女學會

姫百合社

尙綱社

東洋社

帝國婦人協會

大日本佛教婦人會

同文館

國民教育學會

開發社

教育研究所

東京市教育會

哲學雜誌社

女子講習會

東洋哲學會

大日本婦人衛生會

考古學會

婦女新聞社

會報

寄附

本會員 清水たづ子君

一金壹圓也
一金壹圓二十二錢也

德島縣師範學校長 岩崎春次郎君

右本會へ寄附せられたり、茲に謹んで兩君の厚意を謝す

入會

東京ノ部

下谷區上根岸百拾番地
本所區龜澤町一丁目四十六番地
京橋區島海學校内
麴町區中六番町七番地

地方ノ部

群馬縣高崎高等女學校
石川縣師範學校
大阪府高等女學校
福岡縣小倉高等女學校
高知縣高等女學校

小野てる子
印東音鳴
金子忠平
平田いよ子
田邊なみ
金岩かみり
土取のぶ
岸高たき
依岡あい

長野縣松本高等女學校
愛媛縣今治高等女學校
香川縣高等女學校
和歌山縣高等女學校
岐阜縣大垣高等女學校
靜岡縣三島高等女學校
山口縣阿武郡徳佐村
千葉縣千葉町
和歌山縣新宮町
山梨縣中巨摩郡龍王村進藤亨方

會費領收 自七月卅日 至八月十五日

一金壹圓 自三十四年七月
一金六拾錢 自三十五年四月
一金六拾錢 自三十四年七月
一金壹圓貳拾錢 自三十四年七月
一金六拾錢 自三十五年七月
一金六拾錢 自三十四年七月
一金壹圓二拾錢 自三十四年九月
一金壹圓二拾錢 自三十五年四月
一金五拾錢 自三十四年三月
一金五拾錢 自三十四年十二月
至三十五年二月

福本さみ
山崎なみ
蒲生ささ
三浦ささ
迎てる
野口なほ
藤井ちえ
筒井はる
佐々木八千代子
進藤えい

恒川三枝
安達みや
山田孝
木原いさ
阿部つる
藤井ちえ
村上先
三浦ささ
宮川さら

女子高等師範學校教授 黑田定治先生校閱 土屋權四郎君 瀧越源次郎君 共著

國語綴り方

クロス洋裝製
 紙數百八十頁餘
 定價金四拾錢
 郵税金六錢

●附錄

國語綴り方練習帖

尋常定價各金 上番製十錢
 高等定價各金 並番製八錢

本書は小學校國語綴り方に付是が修述の方法程度及材料の選擇上幾多の疑問を明解し文例及教授方法を各學年各學期各目に配當して示し且兒童をして綴らしむる各般の場合につき丁寧に見解を述べたるものにて要は實地教育者諸君教壇の好伴侶たらしむるにあり又附録として別に **兒童用綴り方練習帖** あり之を用ふる兒童諸君の便益又尠少にあらざるべし

發 兌

東京市日本橋區本石町
 三丁目廿三番地

金

昌

堂

發 兌

大坂市東區備后町四丁目

集

成

堂

明治三十四年二月六日內務省許可
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可